

JICA国際協力中学生・高校生 エッセイコンテスト2025 優秀作品集

言葉にすれば、
世界を動かす力になる。

テーマ

世界の幸せのために私たちができること
～未来へつなげるために～

photo:JICA/Atsushi Shibuya

はじめに

独立行政法人国際協力機構（JICA）理事長 田中 明彦



JICA国際協力中学生・高校生エッセイコンテストは、高校生の部は64回目、中学生の部は30回目を迎える歴史のあるものです。今回も高校生の部で17,911点、中学生の部で11,943点、合わせて29,854点ものご応募をいただきました。

今年度のテーマは「世界の幸せのために私たちができること～未来へつなげるために～」でした。入賞作品では、平和や環境問題などを取り上げながら、家族や友達との出来事、自分の幸せの実感から世界の課題へ考えを広げる姿が見られました。日常の出会いや経験を通じ、世界とのつながりを捉えようとする姿勢に深い感銘を受けました。

さて、これからの日本、そして世界で活躍する皆さんに、日々の生活に関心をもってほしい2つの視点があります。

一つ目は「地球規模で起きている課題」です。今、ウクライナやパレスチナのガザ地区、東南アジアなど世界各地で不安定な状況が続いています。また、記録的な猛暑や異常気象が世界で頻発しています。つい最近でも、マダガスカルやモザンビークで大きな洪水が起きています。新型コロナウイルスで皆さんの学校生活が大きく影響を受けたことも記憶されていることでしょう。このような世界で起きている出来事は、お互いに関係しあって、皆さん一人ひとりの生活と深くつながっていることを心に留めて下さい。

もう一つは、様々な背景を持つ人たちと、どう関わるかという視点です。日本で暮らす外国人は約395万人に達し、ベトナムやフィリピン、中国、ネパールなど多様な方々が学校や地域で共に暮らしています。皆さんの作品には、同じ教室で過ごす友達へのまなざしや、違いを超えて理解し合おうとする姿が描かれていました。相手の立場に立つ姿勢は、これからの日本を支える力になると思います。

JICAは世界と日本をつなぐ協力の現場で、人と人とのつながりを大切にしてきました。海外協力隊は派遣開始から60年を迎えて、今でも多くの隊員が世界で活動し、帰国後は地域や学校でその経験を生かしています。国際協力は国と国との関係であると同時に、人と人との信頼の積み重ねでもあります。日本の経験や技術、そして人々の知恵や力が世界で役立ち、そこから生まれる信頼や友情が再び日本へと戻ってくる、その積み重ねが、日本と世界を結ぶ絆になります。

皆さんには、これからも、日本のこと、そして世界のことを「自分の生活に密接に関係するもの」として考え続けてほしいと思います。

本コンテストは長い歴史を重ねてきましたが、学び方の変化や多様な機会の広がりを踏まえ、今回をもって一つの区切りを迎えました。64年間にわたり、時代とともに形を変えながらも、多くの中高生の皆さんが世界に目を向けるきっかけをつくってきました。本コンテストに関わってこられた皆さんが積み重ねてきた歩みに感謝し、その力を次の時代へと確実につなげていきます。

本コンテストの歴史の締めくくりとなるこの特別な場に、皆さんが集まってくださったことに心から感謝したいと思います。ここで生まれたつながりや思いが、次の世代へ、未来へと受け継がれることを願っております。最後に、エッセイコンテストをご支援いただいた皆様に心より御礼申し上げますとともに、これからも未来を担う若い皆さんの成長を応援していきたいと思っております。

受賞者の皆さん、改めておめでとうございます。今後の活躍に大いに期待しています。

2026年3月

目次

はじめに	独立行政法人国際協力機構 (JICA) 理事長 田中 明彦	01
目次		01
審査講評	中学生の部 審査員長 尾木 直樹氏 (教育評論家/法政大学名誉教授/東京都立図書館名誉館長)	02
	高校生の部 審査員長 星野 知子氏 (俳優/エッセイスト)	02
受賞の言葉	大阪府立水都国際中学校 3年 加賀美 さくら	03
	金沢大学人間社会学域学校教育学類附属高等学校 2年 橘 葵衣	03

中学生の部 上位入賞者作品

最優秀賞

独立行政法人

国際協力機構理事長賞	加賀美 さくら	大阪府立水都国際中学校 3年	「学びの力が未来を変える」	04
------------	---------	----------------	---------------	----

外務大臣賞

	町田 愛奈	さいたま市立浦和中学校 3年	「未来への積み立て投資」	04
--	-------	----------------	--------------	----

文部科学大臣賞	関 桃羽	宇都宮大学共同教育学部附属中学校 2年	境界線のない心で	05
---------	------	---------------------	----------	----

優秀賞

	粟野 楓子	学校法人佐藤栄学園栄東中学校 2年	小さな行動から	05
--	-------	-------------------	---------	----

	池上 高貴	お茶の水女子大学附属中学校 1年	喜ぶ笑顔が見たいから	06
--	-------	------------------	------------	----

	阿部 由芽	学校法人明治学園明治学園中学校 3年	循環させる ～未来をつくっていくために～	06
--	-------	--------------------	----------------------	----

審査員特別賞	丸田 楓夏	鎌倉女子大学中等部 1年	小さな一歩がつなぐ未来	07
--------	-------	--------------	-------------	----

	須永 光玲	三重大学教育学部附属中学校 2年	みんなでつなぐ平和アクション	07
--	-------	------------------	----------------	----

	福岡 京	学校法人ヴォーリス学園近江兄弟社中学校 1年	そろばんは世界を救うと信じて	08
--	------	------------------------	----------------	----

	柿野 寛貴	福岡大学附属大濠中学校 2年	何かの変化が世界を動かす	08
--	-------	----------------	--------------	----

国際協力特別賞	葛西 郁佳	八戸市立第二中学校 2年	未来のウミネコや海の生物を守るために	09
---------	-------	--------------	--------------------	----

	長岡 莉奈	山辺町立山辺中学校 2年	学ぶ力	09
--	-------	--------------	-----	----

	石川 叶馬	宇都宮市立見陽中学校 2年	カンボジアで見た現実と、これからの自分	10
--	-------	---------------	---------------------	----

	神田 葵	学校法人立教学院立教新座中学校 3年	釣りから考えたぼくの幸せと世界の未来	10
--	------	--------------------	--------------------	----

	白澤 美乃	飯田市立竜峡中学校 2年	「伝える」力	11
--	-------	--------------	--------	----

	長谷 祐希	静岡大学教育学部附属島田中学校 2年	私の幸せな時間	11
--	-------	--------------------	---------	----

	山田 捺琴	立命館守山中学校 3年	「『いいね』よりも大切なもの」	12
--	-------	-------------	-----------------	----

	佐野 心勇	京都市立大宅中学校 2年	世界とつながる私たち フィリピンで感じた小さな一歩	12
--	-------	--------------	---------------------------	----

	原田 夏帆	阿南市立羽ノ浦中学校 2年	フードロスと飢餓	13
--	-------	---------------	----------	----

	高橋 聡太郎	Garden International School Kuala Lumpur 1年	ホームを救うために	13
--	--------	---	-----------	----

高校生の部 上位入賞者作品

最優秀賞

独立行政法人

国際協力機構理事長賞	橘 葵衣	金沢大学人間社会学域学校教育学類附属高等学校 2年	主観から未来へ	14
------------	------	---------------------------	---------	----

外務大臣賞	萬谷 いちる	市立札幌開成中等教育学校 4年	「地域とともに築く健康」	14
-------	--------	-----------------	--------------	----

文部科学大臣賞	高橋 優衣	福島県立福島南高等学校 1年	小さな行動がつなぐ、世界の子どもの笑顔	15
---------	-------	----------------	---------------------	----

優秀賞	齋藤 花ノ舞	ぐんま国際アカデミー高等部 2年	タンザニアから見つめた幸せの鍵	15
-----	--------	------------------	-----------------	----

	中島 知葉	聖心女子学院高等科 2年	「言語学習でつなぐ心」	16
--	-------	--------------	-------------	----

	渡邊 幸大朗	立命館守山高等学校 3年	「勝つための技術」から、「共に生きる技術」へ	16
--	--------	--------------	------------------------	----

審査員特別賞	志村 凜	北海道帯広農業高等学校 3年	生きる=食べる	17
--------	------	----------------	---------	----

	熊井 彩乃	筑波大学附属聴覚特別支援学校 2年	「アイデンティティってなんやろう？」	17
--	-------	-------------------	--------------------	----

	栗下 琴音	静岡学園高等学校 2年	私の小さな挑戦～アオザイのアップサイクルで繋げるよりよい未来	18
--	-------	-------------	--------------------------------	----

	谷村 七海	三重県立津高等学校 1年	Pages of Hope — 教科書がつなぐ世界と未来	18
--	-------	--------------	------------------------------	----

国際協力特別賞	宮前 律桜子	立教女学院高等学校 2年	想いの連鎖は、国境をこえる。	19
---------	--------	--------------	----------------	----

	本田 結菜	神奈川県立城郷高等学校 2年	選択できる幸せ	19
--	-------	----------------	---------	----

	井川 祥来	近畿大学附属豊岡高等学校 2年	「小さな選択が未来をつくる」	20
--	-------	-----------------	----------------	----

	橋井 樹理	松蔭高等学校 2年	あなたも大切、わたしも大切—世界をつなぐ合言葉	20
--	-------	-----------	-------------------------	----

	石井 大地	独立行政法人国立高等専門学校機構明石工業高等専門学校 1年	等身大の自分から始まる国際協力～義手開発と未来への小さな一歩～	21
--	-------	-------------------------------	---------------------------------	----

	小玉 廉	岡山県立笠岡高等学校 2年	「「生きる」をする」	21
--	------	---------------	------------	----

	森川 卓海	香川県立坂出高等学校 1年	となりから始まる共生社会	22
--	-------	---------------	--------------	----

	山口 雄大	佐賀県立武雄高等学校 2年	一本の橋を、両側から	22
--	-------	---------------	------------	----

	宮里 昌明	昭和薬科大学附属高等学校 1年	つながる	23
--	-------	-----------------	------	----

	賀須井 美咲	N高等学校 2年	透明人間に言葉を着せて	23
--	--------	----------	-------------	----

表彰式/過去の受賞者から贈る言葉	～エッセイコンテストの64年が残したもの～	24
------------------	-----------------------	----

学校での取り組みの紹介		26
-------------	--	----

海外研修		28
------	--	----

審査員一覧/応募総数/入賞者一覧/特別学校賞一覧/学校賞一覧		31
--------------------------------	--	----

国際理解教育/開発教育のためのJICAのプログラム案内		34
-----------------------------	--	----

審査講評

中学生の部

審査員長

尾木 直樹 氏

教育評論家
法政大学名誉教授
東京都立図書館名誉館長



今年度も「世界の幸せのために私たちができること～未来へつなげるために～」というテーマについて、それぞれの体験を通して綴られた読みごたえのある作品に出会えました。

JICA理事長賞の加賀美さくらさんは、小学生の頃に出会ったウクライナ人の同級生との交流を通して「学びたいという気持ちは世界共通」であると気づきます。この経験を機に、海外の子どもへの教育支援活動など、子どもたちの学びの環境を守るため自分にできることに励む姿には、教育に携わる者として勇気をもらいました。

外務大臣賞の町田愛奈さんは、市の模擬国連大

会に参加して議論を行う中で、気候変動問題の解決には各国の複雑で繊細な課題を理解し、対話を続けることが欠かせないと実感します。幸せな未来を形作るための行動を「未来への積み立て投資」という言葉で表現していたのが印象的でした。

文部科学大臣賞の関桃羽さんは、授業で学んだ難民問題について関心を深め、弁護士会の講座に参加。難民支援のためにフードドライブ活動を行うなど、素晴らしい行動力を発揮していました。

64年間という長きにわたり開催されてきたエッセイコンテストも、今年度で最後となりました。中学生の部の審査委員長を10年務める中で私が強く感じたのは、どの作品もエッセイ執筆がゴールになっているわけではないということです。今年度の作品を見ても分かるように、身近な体験やニュースから問題意識を深め、世界中で起こる様々な問題を「自分事」として捉え、「行動」を起こすことまでが見事にセットになっているのです。それこそがJICAエッセイコンテストの最大の魅力だと思っています。エッセイを通して身に着けた力を胸に、是非それぞれの目指す未来に向かって自信を持って歩を進めて行ってください。尾木ママも全力で応援していますよ。

高校生の部

審査員長

星野 知子 氏

俳優/エッセイスト



受賞者のみなさん、おめでとうございます。国際情勢がますます不安定な状況になっている今、真摯に希望をもって取り組んでいるみなさんのエッセイを読んで、心が洗われました。

ここ数年、高校生でも社会人と変わらない専門的な活動している内容が目立つようになりました。

今回理事長賞の橘葵衣さんは、能登半島地震での被災体験とインドネシアの実態をごく自然に軽やかに結びつけ、研究活動に反映させています。顕微鏡を覗きながら世界中で安全な水をと願い、子どもたちへの学びにAI活用を、と励んでいます。その上で科学の力や数字だけでなく、大切なのは人

と接して語り合うこと。しっかり地に足が着いた活動は将来が楽しみです。

外務大臣賞の萬谷いちるさんは、タンザニアの人たちが継続できる仕組みをと自ら実践しながら取り組んでいます。地域の人たちと紙石鹸を一緒に作ることで手洗いの習慣が定着していく様子。観光客へのコーヒーの売上を支援資金にと、アイデアと行動で挑戦する過程。萬谷さんの生き生きとしている姿が思い浮かんで応援したくなります。

日本にいても確かな手応えを感じることが出来ます。文部科学大臣賞の高橋優衣さんが始めたのは、身近で誰にでもできそうな活動です。クリアファイルを集め、換金してベトナムに送ること。そこから大勢の人たちと協力し合い、支援するだけではなく大きな喜びを得ています。寄付金がどう役にたったか。トイレの建設費用の一部です。女子生徒が安心する気持ちが手に取るようになります。これはやりがいがありますね。自分と誰かの喜びとなる。萬谷さんとベトナムの子どもたちの夢がどんどん近づいていくようで素敵なエッセイです。

他の受賞者のエッセイもそれぞれ個性的で魅力がありました。どうぞ今の熱い気持ちを大切に伝えてください。

受賞の言葉

中学生の部

大阪府立水都国際中学校 3年
加賀美 さくら

このたびは、独立行政法人国際協力機構 理事長賞という大変栄誉ある賞を賜り、誠にありがとうございます。

エッセイを書く中で私が最も伝えたかったのは、「学びたいという気持ちは、国や環境に関係なく、誰の中にもある」ということです。異なる文化の中でも学びをあきらめない友人、厳しい環境の中でも学校に通い学び続ける子どもたち、そして日本で教育格差に直面する人々—置かれている状況は大きく異なっていますが、「知りたい」「学びたい」という思いは共通していました。

さらに、エッセイで取り上げた事例は決して特別なものではなく、世界にはさまざまな理由で十分に学ぶ機会を得られない子どもたちが、数多く存在していることにも思い至りました。貧困や紛争、

環境問題、ジェンダーなど背景は異なっていますが、「学びたい」という思いが阻まれている現実があることを、改めて強く感じています。

私は、環境問題や国際問題に関心を持ち、これまで研究や発信、ワークショップなどの活動に取り組んできました。そして、本当の学びとは知識を得るだけで終わるものではなく、自分の足を運び、自分の目で見て確かめ、考え続けることだと思っています。

副賞として予定されている海外研修では、異なる課題や文化を持つ地域を訪れる機会があると伺っています。私はこの機会にぜひ現地で出会う人々の声や日常に触れ、これまで文献やニュースでしか得られなかった知識が、現実の中でどのような意味を持つのかを、自分自身で確かめたいと考えています。

そして、この受賞を一つの到達点とするのではなく、次の学びへとつなげていく出発点として、大切にしていきたいと思えます。

小さな一歩であっても、学び続け、考え続け、そして行動する。それが、よりよい未来につながると信じています。

高校生の部

金沢大学人間社会学域学校教育学類附属高等学校 2年
橘 葵衣

この度は、JICA国際協力中学生・高校生エッセイコンテストにおいて、独立行政法人国際協力機構 理事長賞という大変光栄な賞をいただき、心より感謝申し上げます。自分自身の経験や問いを言葉にした作品が、このような形で評価されたことを、大変うれしく思います。

本作品で私が伝えたかったのは、環境問題や国際的な課題を考えると、客観的なデータや目標だけでなく、一人ひとりの「主観」に向き合うことの大切さです。能登での経験や水の研究、海外での交流を通して、宗教や文化、生活背景によって「当たり前」が大きく異なることを実感しました。同じ課題を前にしても、人によって見えている世界は違います。その違いを出発点にしなければ、解決は表面的なものになってしまうと感じました。

エッセイを書く過程は、これまでの体験や行動を振り返り、それらの意味を自分なりに整理する時間でもありました。日々の研究や対話の中で感じてきた違和感や迷いを言葉にすることで、自分がなぜ行動してきたのかを、初めてはっきりと捉えることができたように思います。そして、このコンテストが、文章表現だけでなく、課題への理解や提案、解決に向けた行動そのものを重視して評価してくださる点は、私にとって大きな支えとなりました。だからこそ、受賞の連絡を頂いたときは、文章だけでなくこれまで積み重ねてきた行動そのものが肯定されたように感じ、自分の歩みに自信を持つことができました。

本作品は、家族、学校の先生方、地域の方々、そしてこれまで出会ってきた多くの人々の支えがあって完成しました。この場をお借りして、心より感謝申し上げます。

これからも、科学的な視点と一人ひとりの主観を大切にしながら、対話と行動を重ね、世界の幸せを未来へつなげていきたいと思えます。



「学びの力が未来を変える」

〔大阪府〕

大阪府立水都国際中学校 3年 加賀美 さくら

「ここ、教えて。」

小学5年生になって間もないころ、私はふいに声をかけられた。振り向くと、透き通るような肌を少し赤らめた少女が、算数の教科書を私に差し出していた。彼女は侵攻が始まる前のウクライナから、両親の都合で日本へやってきた外国人だった。私たちと同じ学校に通っており、一見すると勉強する環境は整っている。しかし、いくら努力しても日本語は難しく、算数の授業でさえついていくのは大変だったそうだ。教室や教科書があっても、言葉や文化の壁は高く立ちだかっていたのだ。やがて私たちは仲良くなり、放課後に一緒に教科書を読み解くようになった。私はできるだけ簡単な日本語で授業に関係する言葉を教えた。だが、逆に私の方が彼女から学んだものは大きかった。一生懸命に理解しようとする彼女の姿からは、「どんな場所でも、どんな環境でも学びたいという気持ちは世界共通だ」ということを強く教えられたのだった。

この経験をきっかけに、私は「学びの機会を守ること」の大切さを強く意識するようになった。中学入学時、ザンビアの小学生の教育を支援する活動を知った。私は「遠く離れた場所でも、自分にできることがある」と感じ、迷わず参加した。この活動では、現地の小学生に全国から集めた計算カードや足し算・引き算の問題集を送り、返却された答案を採点する。驚いたのは、ザンビアの子どもたちの多くは小さな棒のようなものを紙に一本ず

つ書いて計算していたことだ。二桁の計算でも数十の棒を書き、最後まであきらめずに数え続ける。びっしりと小さな棒で埋め尽くされた答案を見て、私は言葉にならないほどの感動を覚えた。日本から遠く離れていても、やはり「学びたい」という意欲は同じだった。

そして、日本の中にも学習に困難を抱える子どもは多い。厚生労働省によれば、2021年には9人に1人が相対的貧困の状態にあった。義務教育や衣食住は一定程度保障されているため「目に見える貧困」は少なく感じられる。しかし、教育格差は進学率や就職先に影響を与え、貧困の連鎖を生み続けている。

私はこのような教育の現状を少しでも変えたいと思い「SDGs17：パートナーシップで目標を達成しよう」の精神に則り、学校で国際部を立ち上げた。募金活動やさまざまな支援活動を通じて、世界中の子どもたちの学びの環境守り、未来へとつなげるために貢献したいと考えている。さらにもっと多くの同世代の若者たちを巻き込み、その輪を世界中へと広げていきたい。一人の力は小さいかもしれない。しかし、その小さな意識と行動の積み重ねこそが、未来へ学びをつなぎ、平和で幸せな世界をつくる原動力になると信じている。

「ありがとう、教えてくれて。」

彼女のその一言は、今でも私の中で響き続けている。



「未来への積み立て投資」

〔埼玉県〕

さいたま市立浦和中学校 3年 町田 愛奈

私は、今年八月に行われたさいたま市模擬国連大会に参加した。私が担当したのは中国大使だった。中国は世界最大の二酸化炭素排出国であり、国際的な気候変動対策には欠かさない存在だ。私は中国という国の立場で「脱炭素に積極的」と主張したが、議論を進めるうちに、実際には経済成長を優先したいという考えが生まれる場面にも何度も直面した。

ある国が「二〇三〇年までに二酸化炭素排出を半減しよう」と提案すると、中国の立場としては「技術的にも経済的にも現実的ではない」ため賛同できない。排出削減に強く出れば、他国から評価される一方、自国の経済的・技術的発展を妨げることになる。

この「本音と建前のバランス」をとりながら交渉することの難しさ、そして他国の代表たちもまた、それぞれの事情や利害を抱えていることを痛感した。議論の中でも、自国が何を優先すべきで、どこまで妥協できるのか、その塩梅を見つけることに苦戦した。様々な対策案が出される中で全員の利害が一致し、納得する案が出せないもどかしさを覚えた。

最終的な合意形成には時間がかかった。だが、どの国の代表も「未来を守りたい」という共通の願いを持っていた。相手の立場を理解し、譲れる部分を探り、わずかでも合意に近づいていく過程は私の心にとどまっていたもどかしさが次々に解決されていくようで嬉しく、忘れられない経験となった。

この経験を通じて、私はSDGsの目標十三「気候変動に具体的な対策を」がどれほど複雑で繊細な課題かを実感した。以前までは、環境破壊を防ぐことは政府が動けばすぐに問題解決ができるだろうと、安易に考えていた。「環境破壊を防ごう」と言うこと自体は簡単だが、そこには、経済・政治・歴史など多くの要素が絡み合っている。だからこそ、すぐに解決はできない。それでも、他国と対話し続けたり、諦めずに交渉し続けたり、そのような努力を積み立てることが、問題解決には欠かせないのだと思う。

気候変動は、一人で解決できる問題ではない。ましてや中学生の私にできることは限られる。けれど、年齢に関係なく、一人ひとりが「自分の行動は未来につながっている」と意識することから変化は始まると思う。例えば学校生活での取り組みとしては、種類ごとのゴミ箱を設置し、分別を促したり、手洗い中の節水を心がけて水の使用量を減らしたり、プリントの裏紙を再利用したりすることが挙げられるだろう。このような小さいことでも積み立てをしていくことが重要なのだ。

世界の国々は利害で分断されているようで実は未来への思いでつながっている。いつか諦めない対話と行動によってすべての国の利害が一致し、気候変動が改善され、誰もが平等に幸せに暮らすことのできる世界に変わっていくことを願う。そのために私は今日も自分の未来を形作る小さい行動、いわば未来への「積み立て投資」を続けていこうと思う。



境界線のない心で

〔栃木県〕

宇都宮大学共同教育学部附属中学校 2年 関 桃羽

私は毎日安心して学校に通い、ご飯を食べ、家族や友達と過ごすことができている。しかし、もし突然「日本で暮らしてはいけません」と言われたら、どう感じるだろうか。実際に、そんな状況に置かれている人が日本にもいる。難民認定を受けられず、仮放免のまま暮らす人たちだ。

私が初めて「難民」を知ったのは道徳の特別授業だ。資料の中に、8歳で家族とともに中東から逃れて来日したライラさんの話があった。彼女は7年経った今も仮放免の状態、一家は働くことが許されず、県外へ出ることも制限されている。そのため修学旅行にも行けなかった。私は次の春に修学旅行に行く。半年以上先のことだが、今からどこに行こうか何を買おうかと友達と話題にすることも多い。その時のライラさんの悲しみと疎外感は何れほどのものだっただろうか。私は、日本は平和で外国人にとっても暮らしやすいすばらしい国だと思っていたので驚きを隠せなかった。それと同時に自分が知っている世界の狭さを感じた。

私は今まで自発的に何かを起こす方ではなかった。しかし、「このままでいいのか?」という気持ちが心の奥から湧いてきた。もっと知りたいと思い、東京弁護士会の難民PTの講座に参加した。入管収容を経験したサファリさんの話や、改宗により命を狙われる人、LGBTQであることを許されない人、政治の対立や文化の違い、紛争や迫害など様々な事情により難民申請者に

ならざるを得なかった人々が日本で厳しい状況に置かれていることを初めて知った。外国人が治安を悪化させると考える人もいるが、私たちは難民に対する正しい理解が必要だと思う。命を守るために祖国を離れなくてはならなかった被害者なのだ。授業では、人間には生まれながらにして等しく人権があると学んだ。つらい経験を抱えながらも希望をもって来日した彼らが安心して過ごせる第二の故郷に日本がなることを願う。

働けないとお金がない、お金がないと食べられない。支援の一つに食料の提供があると聞いた。すぐにフードバンクに連絡をとり、食品配布会に参加した。言葉は通じなくても、笑顔で帰る姿に心が温まった。家庭で余っている食べ物を持ち寄りまとめて寄付するフードドライブ活動なら私にもできる。通っている中学校を巻き込んでこの活動をすべく奮闘中だ。

今の私には、法に基づくアドバイスも直接的に難民認定の支援をすることもできない。しかし、中学生の私の言葉だからこそ耳を傾けてくれる人がいると思う。少し前までは知らなかった世界の話。決して遠い国のことではない、たしかに今この国で起きていること。私の発信が広い世界に届くことを願って。

私の将来の夢は弁護士になった。難民支援PTで聞いたある言葉が忘れられない。

～安全に生きたいと願う心に、生まれた所は関係ないから～



小さな行動から

〔埼玉県〕

学校法人佐藤栄学園栄東中学校 2年 栗野 楓子

私は小学四年生の時に初めて環境問題について学びました。その時、クラスで何かできることはないかと考え、クラスの探求学習として「海洋プラスチックの削減」を学びました。

学習を進めていくと、環境活動家の豊田直之さんの出前授業を受ける機会がありました。豊田さんは神奈川県最西端から海岸線に沿ってゴミ拾いをしながら最東端を目指すという活動をしています。また、その時点で約千三百キログラムのゴミを回収していました。私はそれを聞いて約千三百キログラムもゴミが落ちていたことにとっても驚きました。そこで、日本にはどのくらいの海洋ゴミがあるのか気になり、調べてみると年間約二万トンから六万トンの海洋ゴミが流出しており、日本に漂着するものも含めると約三十五万トンから六十万トンにもなるということを知りました。豊田さんはエコバックを使用したり、水筒を使うようにするなど、小学生の私達にも簡単にできることを教えてくれました。

でも、私はそれらを実践するだけでなく、「豊田さんのようにゴミ拾いをやりたい!」とクラスメイトに呼びかけました。すると多くのクラスメイトが賛同してくれ、海に面している「高島水際線公園」で実際に豊田さんとゴミ拾いをすることになりました。私はもともとこの公園はあまりゴミがないきれいなイメージを持っていたのでそんなにやることはないだろうと思っていました。しかし、意識して海の近くや茂みの中を見てみるととても多

くのゴミがありました。最終的に二十袋以上のゴミを回収する事ができました。そこまで広くない公園からここまでたくさんのゴミが出たことは私にとって予想外のことでした。

その中でも特に多かったゴミがペットボトルでした。ペットボトルのことを調べていくと、ペットボトルをリサイクルしてできる布があることを知りました。そこで、私達が拾ったペットボトルを布を作っている会社へ送り、実際に布を作ってもらいました。その布が届いた時、最初は小さな興味から始まった事がちゃんと成果を出せていると実感し、嬉しくてたまらなくなりました。その布を使ってエコバックを作り、それを使って買い物にも行きました。

私はこの経験を通して感じたことが二つあります。一つは小さな行動でも続けることがとても重要だということです。例えば一回エコバックを使って満足するのではなく、継続して使うなど環境に良い行動を日常の中に一つでも増やしていきたいと思いません。二つ目は周りを巻き込むということです。環境問題に限らず、大きな問題は一人がいくら頑張っても解決することはありません。だからこそ自分の身近なところから呼びかけて行動に移し、少しでも早く問題が解決するように努力していきたいです。

優秀賞

喜ぶ笑顔が見たいから

〔東京都〕

お茶の水女子大学附属中学校 1年 池上 高貴

「こんな日がくるとは思ってもいなかった。」と母は度々つぶやく。それはほぼ、朝僕の髪を結んでくれる時に独り言のように言う。出掛けた先で、

「編み込みが上手ですね。ママがしてあげているのですか。」と聞かれた時にも、

「男の子を産んで髪を編んであげる人生が来るなんて・・・」

と笑いながら答える。僕自身もずっと短髪だったから、髪を結んでいる自分を想像したことなどなかった。

僕は小学五年生の夏から髪を伸ばしている。きっかけは習い事で髪を伸ばす必要がでてきたからだった。ちょうど2年経った今は28cmに伸びて、容姿から女の子と見間違えられることがよくある。驚かれはするけれど、ジェンダーレスの時代だからか、からかわれたり傷つく言葉を言われたことは一度もない。なぜ、僕が髪を伸ばし続けているのか、不思議に思う人に「ヘアドネーションをしたいから。」と答えると、知っている人は多くはない。「ヘアドネーション」という言葉を見聞きしたことがあるだろうか。「ヘアドネーション」とは、病気や不慮の事故などで髪を失った子どもに、髪の毛を寄付する活動のことだ。僕が初めて知ったのは、母に動画を見せてもらった2年前だった。帽子を深く被ってうつむいたままの男の子が、ドネーションされた髪をつけ鏡に映った自分を見た時の輝く笑顔が忘れられない。そして横で見守っていた家族が抱き合っただけ泣いていたことに、僕の心は動か

された。

調べてみるとヘアドネーションは思った以上に、世間に知られていなかった。言葉の認知率は全国で男女合わせて五割程度に過ぎなく、その内訳は男性が三割、女性が七割ということだった。それに加えて、ヘアドネーションを実際にしたことがある人は男女合わせて14%と少ない。それだけではなく、僕は自分の髪の毛を寄付することで一人の笑顔に結び付くと思っていたが、大きな勘違いだったと気が付いた。一人分のウィッグを作るためには、およそ30人の髪の毛の寄付が必要なのだそう。

僕だけの髪では全然足りない事実にたどり着いた今、どうしたら沢山の協力に結び付くのかを考えた。まずは僕が髪を伸ばしている事で不思議に思われる事を活かすことにしよう。行く先々で、「娘さん」「お嬢さん」と言われた時こそが興味関心を持ってもらえた大チャンスと捉えて、実は男子です。と答えるだけでなく、僕のヘアドネーションへの志と共に、沢山の協力が必要な事実も伝える活動をしていこう。苦しんでいる一人を笑顔に変えた先には、その家族や周りの人をも喜ぶ笑顔に変える力がある。沢山の喜ぶ笑顔を想像すると、とても心が温かくなる。ヘアドネーションが架け橋となり、沢山の喜ぶ笑顔へ繋がる力があると僕は信じて広めたい。

優秀賞

循環させる ～未来をつくっていくために～

〔福岡県〕

学校法人明治学園明治学園中学校 3年 阿部 由芽

「分解者とは、生物の遺がいや排出物から有機物をとり入れ、無機物に分解する生物だ。」私は、このことを理科の授業で学び、知った。早速、私はこの夏休みを利用し「分解者」の力を借りて、家庭内の資源を循環させる畑コンポストを作ることで、数年間気になっていた裏庭の畑の再生に乗り出した。

八年前の九州北部豪雨の際、この小さな畑は、浸水した。原因は流れてきたプラスチックボールが排水口に詰まったからだった。このことが、プラスチック製品などのコンポストを使用せずに、直接畑で生ゴミを土に還す畑コンポストにこだわった一因になった。

本来ならばまだ食べられるのに、捨てられてしまう食品ロスの問題は、私達にとって大きな課題の一つだ。今回の畑コンポスト作りで注意したのは、「畑コンポストを作ることが家庭内の食品ロスにつながることはないように」ということだ。つまり、食品ロスを極限まで減らす努力をしたうえで、野菜の皮やヘタ等の不可食部分のみを利用するというやり方だ。可燃ゴミとして焼却されなければ、地球温暖化の原因の一つであるCO₂が減り、環境負荷は減るかもしれないが、大切なのは食品を無駄にしないという行為とセットにすることだと私は考えるからだ。

まず、私は家庭内から出た生ゴミの量を一日の終わりに計測し、生ゴミの種類や内容などを詳しく記録した。家族に協力してもらうことで、食べ残しはゼロになり、買い物をする時もリスト

を作って買うことで、重複買いを防止し、食品を無駄にしない努力をした。この結果、十日間で取り組み前より、一日平均二百二十グラムの生ゴミを減らすことに成功した。

次に、家族に協力を仰ぎ、畑の雑草を取り、深さ二十センチ程度の穴を掘った。雑草は、「分解」を助ける為に生ゴミと一緒に入れる必要があるため、天日で乾かした。それと同時に庭の落ち葉を集めて準備した。

結果として十日間で、家庭から出る生ゴミの量を千二百グラム削減し、畑コンポストに食品の不可食部分を利用することで、食品廃棄物は、ほとんど無くなった。また雑草等、普段ならば廃棄物となるものも、再利用する事によって、約八千グラムの廃棄物削減にもつながった。

私は、今回実際に授業で学んだ「分解者」という知識を利用し、家庭内で資源を循環させようと考えたが、人それぞれ出来ることや、興味関心の方向性は違うだろう。しかし、普段から自分のアンテナの感度を上げて、大切なことをキャッチしたら、少しのことで良いから行動してみる事が重要なことだと私は考えている。なぜならば今回、実際に自分で仮説を立て、アクションを実践して得られた「結果」は私自身にとって大きな自信になったからだ。私達一人一人が、自分自身の力を信じ、自分事として考え行動することでしか、未来はつくっていけない。

審査員
特別賞

小さな一歩がつなぐ未来

〔神奈川県〕

鎌倉女子大学中等部 1年

丸田 楓夏

「青くて綺麗な色をした海」、「色とりどりのフルーツ」。私は、フィリピンに対して、このような明るいイメージを持っていた。しかし2年前、家族でフィリピンに行った時、想像もしなかった現実を知った。

夜に家族でコンビニに行った時のことだ。私たちが店内に入ろうとすると、小さな男の子がドアを開けてくれた。お礼を言っている中に入ると、その子は追いかけてきて手を差し出した。“money.”一瞬、頭が真っ白になった。そして数秒後やっと私は理解した。この子はお金が欲しいのだと。困って下を向いた私の目に入ったのは、汚れた裸足の足だった。

これは私にはとても衝撃的な出来事だった。私よりも年下の子が、夜中にお金をねだっているという現実が信じられなかった。日本に帰ってきてからも、あの男の子の悲しげな顔が忘れられなかった。あの子の力になりたいと思った。そこで、スーパーに置いてあった募金箱に自分のお小遣いを募金した。

しかし募金をしても、なぜか気持ちが晴れなかった。お小遣いは結局のところ、親からもらったお金だ。私自身は何も行動を起こせていない。私は、自分自身の力で何かをしたかった。そこで私は、中学生でも自力でお金を稼げる方法を探した。そして「子ども夢の商店街」を見つけたのだ。

「子ども夢の商店街」は、子どもが自分でお店を開き、商品やサービスを売るという企画だ。通貨は「むすび」で、1むすびには

50円の価値があり、得られたむすびはレストランやケーキ屋などの実際のお店でも使えるシステムになっている。

私は、自分の得意な折り紙を使ったキーホルダーを製作して販売することにした。キーホルダーを作るのはとても手間がかかり、少ない空き時間の中で量産するのに苦労した。販売当日も、売れると予想して多く作ったものが全く売れなかったり、お客さんが集まらなかったりして困難ばかりだった。それでも、なんとか90むすび（日本円にして4500円）を売り上げることができた。

90むすびを親に渡し、参加費や材料費などの経費を引いた利益として2000円を親からもらった。そしてそのお金を、ストリートチルドレンを助ける団体に寄付した。自分で稼いだお金を渡したことで、中学生の自分でも力になれたのだと、明るく幸せな気持ちになった。あの子の笑顔が頭に浮かんだ。

しかし、私が力になれたのはまだごく僅かだ。あの男の子のような厳しい状況で暮らしている子どもはたくさんいる。世界には、児童労働をしている子どもが一億六千万人も存在しているのだ。私1人ではその子たち全員の力になることはとてもできない。それでも、1人ひとりの少しの支援の積み重ねが、もっと多くの子どもたちの幸せを生む。私は、その幸せを広げていきたい。

たとえ小さな一歩でも、自分から行動を起こしてみる。それが、フィリピンの、いや世界の幸せにつながる方法なのだと信じて、私は行動し続ける。

審査員
特別賞

みんなでつなぐ平和アクション

〔三重県〕

三重大学教育学部附属中学校 2年 須永 光玲

「私は中学生。それでも、何か出来ることはない？」世界で起きている戦争の悲劇をテレビで目の当たりにしながら、私は自問自答を繰り返していた。私たちができる平和への道を開く行動は、果たして何か。自分なりの答えを見つけるため、私は今年六月、上智大学の国連ウィークイベントに参加していた。シンポジウムのテーマは「人間の安全保障」だ。国際協力機構の田中理事長から、現在は世界各地で内戦やテロ、戦争が起こっており、それは社会システム内の脅威だと学んだ。そして、社会システムが上手く機能しなければ安全保障を守れないため、自分の国のことだけに目を向けるのではなく、世界中で安全保障を協力していくことが大切だと再認識した。

暴力や紛争のない社会に近づくためにじっくり考えること、数日間。私は、やっと二つの行動を思いついた。そして、私一人だけの力で何か行動にうつすのではなく、出来れば中学校全体で皆と平和の大切さを共有したいと考えた。一緒に発信することで、より強いメッセージにつながるからだ。

平和へのアクションその一。それは「平和の折り鶴を折って広島に届けること」だ。私は、今年の前期は、生徒会で外部連携活動部に所属していた。そして、副部長として広島への平和の折り鶴募集を全校生徒に呼びかけたいと強く思った。先生の許可をいただいた後、早速折り鶴募集ポスターを作成し、昼休みには放送で協力をお願いをした。その後、全校生徒が、次々と積極的

に鶴を折ってくれた。あっという間に皆の想いが形となり、折り鶴が広島に届けられたのだ。

次に、平和へのアクションその二。それは「合唱発表会で、平和への想いを歌で届けること」だ。私の通う中学校では、今年は十月三十日に合唱発表会がある。夏休み前に、どのクラスも選曲をする。クラス全員が一人一人好きな曲とその理由を報告し、最終的には多数決で一曲が決まる仕組みだ。そして、私のクラスの曲は、私も選んだ「HEIWAの鐘」に決定した。この曲には、拳をひろげて手をつなぐことで、争いをなくし平和を作ろうというメッセージが込められている。そのため、多くの人に発信し伝えたい曲だ。夏休みの間、私たちは一人一人パート練習をした。私はピアノ伴奏ではあるが、合唱発表会当日もクラスメートと一緒に歌詞に想いをのせて歌いたい。このように今年は学校全体が丸となって、平和推進のために行動できたことに、私は充実感でいっぱいである。

最後に、目標を達成するには、心の中で思っているだけではなく、実際に行動にうつすことが大切だ。そうすることで、一人一人の意識が大いに変わってくると思う。だから、私は平和へのアクションを今後も学校全体で続けていきたい。そして持続可能な開発目標の十六番目である「平和と公正をすべての人に」へ近づきたい。平和の鐘が人々の心に響き広がることを祈って。

審査員
特別賞

そろばんは世界を救うと信じたい

〔滋賀県〕

学校法人ヴォーリス学園近江兄弟社中学校 1年 福岡 京

僕は、5歳からそろばんをはじめた。毎朝練習してから学校に行く生活を続けると、上達し、そろばん検定は段位を取得した。紙と鉛筆がなくても頭で計算できるので、学校で得意な教科は算数になった。学校以外でも、おみやげでもらったお菓子を人数分にわけるときのわり算もすばやくできるから、何かと友達からも「計算して」と頼まれることがある。母との買い物の時も計算しながら、商品をかごに入れる係となった。母はよく、僕の計算力をほめてくれた。「計算できることはだれからもうばわれることのない財産で、その能力は将来あなたの武器となる」と言われていた。僕は、ほめられることがうれしかったが、「将来頭が武器になる」という言葉にはピンとこなかった。

「武器」という言葉は、戦争に結びつく。現在も戦争で武器は人の人生までも破壊し続けている。世界が平和でないことに心が痛い。しかし、中学生の僕に何ができるのか、わからない。何もできない自分がくやしい。

このテーマを考えるために、図書館へ行きJICAの雑誌を手にとった。そこには、日本の教育協力、SDGsの「目標4」にある「質の高い教育の確保」があった。それは、一生にわたり学習できる機会を広めることに、計算能力の習得がつながる。現在も貧困や紛争、自然災害などで、学校に通えない子供や基本的な読み書きができない人が大勢おり、JICAや国際機関が協力して施設や教材の整備、教員の人材育成などを行っていることを知った。

もっとよく調べていくと、トンガへ珠算隊員として活動された方の事例を読んで、「僕にできることはこれだ。」と思った。僕は小学校入学する前に九九を覚えた。九九の歌で覚えたので楽しかった。この経験を活かすことができる。きっと僕のそろばん力、暗算力は、人のために役に立たせることができる。世界の多様な言語と違って、数字は世界共通なことが多い。そろばんができる楽しさを僕なら教えることができる。

世界の発展途上国や、紛争のある国へそろばんを普及し、計算ができる子どもを増やすことができれば、貧困や戦争をなくせるのではないかと考えた。計算ができれば、人からだまされることなく、仕事に就くことができる。計算の楽しさを知った子供たちが将来、先生になることだってできるのだ。

「計算力をもった頭は武器になる」の言葉を思い返した。戦争をする手段の武器ではなく、計算力は自分の強み＝武器なのだ。特に戦争や紛争によって教育を受ける権利をうばわれる世界になってはいけないのだ。何もかも破壊する武器を持つのではなく、より高い教育をうけるためにそろばんという武器に持ちかえてほしい。未来へつなげるために、そろばんは世界を救うと信じたい。

審査員
特別賞

何かの変化が世界を動かす

〔福岡県〕

福岡大学附属大濠中学校 2年 柿野 寛貴

僕には毎朝弟と訪れる公園がある。その公園は緑豊かで、小学生の頃から友達とたくさん遊んできた。そこで毎朝あるおばさんと会うのだが、その人は毎日欠かすことなくゴミ拾いをしていて、僕たちに明るく挨拶してくれる。夏休みの宿題としてこの作文を書いた僕は、最初「世界の幸せのために私たちができること」というテーマを読んで、ゴミ拾いや省エネが思い浮かんだ。その時あのおばさんの事を思い出し、「五日間近所のゴミを拾ってその重さを量る」という取り組みを実施した。すると、五日間で約一・三キロものゴミが拾えたうえ、この近所にこんなにもゴミが散乱しているという事実を知ることができた。ゴミを拾って僕が感じた事、そして、その状況を改善するために出来る事を大きく二つ考えてみた。

一つ目は、ペットボトルのゴミが非常に多いということだ。僕が拾ったゴミの中でも半数くらいはペットボトルだった。清涼飲料水や炭酸飲料など、様々なペットボトルが捨てられていた。確かに取り組みを実施した夏休みはとても暑かったし、熱中症対策はしないと厳しいので、このようなゴミが増えるのも理解はできた。ペットボトルのゴミを減らすための対策案としては、「水筒を持参する」ことが有効だと考えた。所有物である水筒を持っていくことで、捨てるという感覚が無くなるだろうし、水筒内に飲料を入れると水分補給もできると思う。

二つ目は、生ゴミ、煙草、ポリ袋などが歩道や駐車場などに捨

てられていて非常に迷惑であるということだ。僕がゴミ拾いをした場所では、煙草の吸殻が吸殻入れから溢れていたたり、一番ひどかったのはある駐車場で弁当の食べかけが捨てられていたり。少し歩けばコンビニに設置してあるゴミ箱があるというのに、こんな無責任な人がいるのかと少し憤りを覚えた。対策としては、呼びかけていくしかないと思った。僕が拡散できる人はごくわずかだが、その輪を広げていかないと、このような問題は永久に解決しないと思う。

僕は、五日間だけでもゴミ拾いを行ってみたことで、あのおばさんの大変さを感じる事ができ、そして感謝の気持ちを心から持てるようになった。考えた対策もありきたりなものだが、こういう小さなことを知り、行動し、継続していくしかゴミ問題解決への道はないと思う。僕の中に起きたようなゴミ拾いに対する向き合い方の「変化」のようなものが他の沢山の人や社会に共有され、それが拡散していき、世界をより良い方向へ動かしていく。明日おばさんに会ったらこう心から言える、「おばさん、いつも当たり前にしてくれて、本当にありがとうございます」



未来のウミネコや海の生物を守るために

〔青森県〕

八戸市立第二中学校 2年 葛西 郁佳

私が住んでいる青森県八戸市には、国の天然記念物である燕島がある。燕島はウミネコの繁殖地で、近くでウミネコを観察できる。私は小学5年生の時から中学2年生である現在まで月に1回程度、燕島の海岸や海やウミネコを観察している。燕島に定期的に行くようになったきっかけは御朱印集めだった。燕島神社の月替わりの御朱印を集めるために毎月通った。次第に、ウミネコについての疑問や興味がたくさん出てきたので、より詳しく観察するようになった。海岸から約20mのところは海が透き通っていて海底が見えてきれいだなと思ったり、砂浜にはゴミがないなと思ったりした。しかし、船着き場には缶や素材の分からない人工のゴミがあることに気づいた。燕島の観察を始めて約1年経ち、中学校に入学したころ、SDGsの目標14「海の豊かさを守ろう」が守れているのか気になって調べると、海洋プラスチックの量は、減るどころか増えていることを知り驚いた。私はSDGsを意識して生活しているので、道端に落ちていたプラスチックゴミを拾い、リユース・リデュース・リサイクルを実践している。しかし、皆がSDGsを意識しているわけではないようだ。海洋プラスチックゴミがウミネコに影響を与えていないのか気になり、ウミネコについて詳しく観察し、現状を知り、何ができるか考えることにした。そこで、鳴き声を自分の耳で聴くだけでなくICレコーダーで録音し、一羽一羽の顔や羽などを観察した。羽に何かついて

に影響があるかもしれないと思った。

私は、多くの人が今の海の状況やウミネコなどの海鳥やその他の海の生物について知り、身近な問題として捉えることがプラスチックゴミを減らすことにつながると思った。私ができることは、自分が取り組んだウミネコの観察や研究を、友達や他の人など一人でも多くの人に伝えて、ウミネコを大切に思う気持ちを持ってもらうようにすることだと思った。そこで、録音したウミネコの鳴き声を音響分析し研究をまとめて、中学1年生の秋に市の中学生理科研究発表会で発表した。この発表により自分の研究を市内の多くの中学生に聞いてもらうことができた。さらに、私がウミネコについて研究をしたことは地元の新聞にも少し掲載されたため、新聞の読者が記事を読んでウミネコへの感心を高めてくれたかもしれない。ウミネコについて調べ続け、自分が可能な方法で発信し続けることはよりよい未来につながると思ったので、現在もウミネコの観察と研究を続けている。昨年はウミネコの鳴き声だけを録音し分析したが、今年は鳴き声を録音することに加え、鳴くときの動作を録画して分析している。私は、燕島やウミネコをとっても大切に思いながら観察と研究を続けていく。それが未来のウミネコや海の生物を守ることにつながると信じている。



学ぶ力

〔山形県〕

山辺町立山辺中学校 2年 長岡 莉奈

分からなかった問題がふと解けた瞬間、胸が熱くなるような喜びを感じました。学べる環境があることは、当たり前ではありません。しかし、世界にはその喜びを知らずに過ごす子どもたちがたくさんいます。教育を受けられない理由は貧困、戦争、性別による差別、そして食べ物が足りないことです。お腹が空いては学ぶどころではなく、多くの子どもたちは生き延びるために働かざるを得ません。その結果、学ぶ機会を奪われ、未来を描く自由まで失ってしまいます。

ニュースで、医療体制が整わず多くの母子が命を落としている地域を知りました。そのとき、助産師は赤ちゃんを取り上げるだけでなく、母や家族に正しい知識を伝える「教育者」であることを知りました。学びがあれば救える命があり、知識があれば守れる未来がある。私は外国で助産師として働き、命を守りながら教育の大切さを広めたいと強く思いました。

教育・食べ物、平和。この三つは切り離せません。栄養が足りなければ母も子も危険にさらされ、戦争があれば安全な出産の場もなくなります。そして教育がなければ、未来を変える力は生まれません。私は助産師として、命を守り、教育の大切さを広める存在になりたいと思います。

では、今の私にできることは何でしょうか。まず、自分が学べる環境に感謝し、学びを大切にすることです。毎日の勉強を一つひとつ丁寧に言い、知識と力に変えて将来につなげます。次に、

食べ物を無駄にしないことです。家や学校での小さな行動でも、世界の命を守る意識につながります。そして、ニュースや本で現状を知り、それを友達や家族に伝えること。小さな声や行動でも連鎖すれば、遠く離れた場所の未来を動かす大きな力になります。さらに、募金やボランティアなど具体的な行動にも挑戦したいと考えています。今の私の積み重ねが、いつか命を守り、教育を広める大きな力になると信じています。

学びは、生きる力を育て、命を守り、社会を変える力です。私の夢は、外国で助産師として働き、教育の大切さを伝え、命を未来へつなぐこと。そのために、今できることを一歩ずつ積み重ね、学びを力に変えていきます。

世界の幸せは遠い場所にだけあるのではなく、私の行動一つひとつの先に広がっています。そのことを胸に刻み、私はこれからも、世界の幸せのために、自分の力を使い続けます。

小さな一歩から、未来を変えるために。

カンボジアで見た現実と、これからの自分

〔栃木県〕

宇都宮市立晃陽中学校 2年 石川 叶馬

中学1年の春休み、親にすすめられて参加したのはカンボジアのスタディツアーだった。地雷博物館や工房「SALASUSU」の見学、孤児院訪問、アンコールワットの観光を含む5日間の旅。僕にとっては初めての海外で、「初めての外国、楽しみだな」くらいの軽い気持ちで参加した。

カンボジアには孤児院が多い。1970年代の内戦で先生や知識人が大量に殺され、教育の仕組みが壊された。その影響で親を失った子どもが増え、今も貧困や病気で家庭が機能せず、孤児院に預けられる子が後を絶たない。今回のツアーでは、そうした孤児院のひとつを訪れる機会があった。

孤児院で出会った子どもたちは、くたびれた服を着ていて、最初は「かわいそうだな」と思った。でも、なんて話しかければいいのかわからず戸惑っていた僕にも、彼らは笑顔で話しかけてくれた。言葉も通じないのに、すごく楽しそうだった。その姿を見て、僕はハッとした。無意識に「かわいそうな子であるべき」と思っていたことに気づいた。彼らの笑顔は本物だった。その笑顔が、僕の中にあった偏見を静かに壊した。

一方、「SALASUSU」では、日本のNPOの支援で現地の人たちがイグサでサンダルやアクセサリなどを作っていた。みんな楽しそうに働いていて、自分の力で生活しようとしていた。その姿を見て、「自立する力」ってこういうことかもしれないと思った。

だが、孤児院では勉強している様子も先生らしき人も見かけ

ず、パソコンやネットもなかった。孤児院の子どもたちが将来こうして働けるようになるには、やっぱり教育が必要だ。教育が足りないまま社会に出ると、仕事が見つからず生活が苦しくなり、自分の子どもを育てられずに孤児院に預けることになるケースもあるという。そうやって、次の世代がまた孤児院に戻ってくる可能性がある。だからこそ、教育の支援が必要だと思った。

僕は将来プログラマーになりたい。もしその技術で孤児院の子どもたちに勉強のチャンスをお届けられるなら、教育支援アプリを作りたい。先生が足りない地域では、動画や音声で学べるオンライン授業のような仕組みが、学びのきっかけになると思う。

だが、通信や電力などのインフラが整っていない場所も多い。だからこそ、先生が増えたり環境が整うまでの“つなぎ”として、技術で支えられたらいい。オフラインでも動き、電力が不安定でも使える設計。そして現地の人たちが自分たちで維持・管理できるような、シンプルでわかりやすい仕組みにしたい。

最初は「楽しみだな」と思っていたけれど、今は世界のことを考えている。僕にできることはまだ小さい。でも、知ったからこそ考え続けたい。そして、いつか行動につなげたい。その行動が、現地の人たち自身の手で育て、守っていけるような仕組みにつながるように。

僕の夢が、誰かの未来を支える力になるように、これからも考え続けたい。

釣りから考えたぼくの幸せと世界の未来

〔埼玉県〕

学校法人立教学院立教新座中学校 3年 神田 葵

ぼくにとっての幸せは、家族や友人と一緒に釣りをしている時間です。まだ太陽が昇る前の堤防で、竿を垂らしながら朝ごはんを食べて待つ時間。魚が釣れたときはもちろんうれしいけれど、たとえ釣れなくても、その場にいただけで心が落ち着き、「ああ、今しあわせだな…」と自然に思えます。風や波の音鳥の鳴き声、そして家族や友人との何気ない会話。そんな時間がぼくにとってかけがえのない幸せです。

しかし、ある日釣りに行った海でゴミがたくさん浮かんでいて、魚もほとんど釣れなかったことがありました。海岸にはペットボトルやお菓子の袋、使い捨てのカップなどが散乱していてせっかくの楽しい気持ちが台無しになりました。その時父が、「昔はもっと魚が釣れたし、こんなに汚くなかったんだけどな」とつぶやいたのが印象的でした。ぼくは「自分の幸せな時間が、誰かの無責任な行動で失われてしまうかもしれない」と感じ、とても悲しくなりました。

それから釣りに行くときはゴミ袋を持参し自分の周りだけでもきれいにするようにしています。最初は正直、面倒くさいと思いましたが、続けていくうちに「きれいにするって気持ちいいな」と思うようになりました。一緒に行く友人にも声をかけてみたところ、一緒にゴミを拾ってくれて、うれしかったです。

この経験から、ぼくは気づきました。自分の幸せを守ることが、実はまわりの人や未来の人たちの幸せにもつながっていると

いうこと。きれいな自然を守ることで、生き物もすみやすくなり、同じ場所で誰かがまた楽しい時間を過ごせるかもしれない。そして、それが積み重なれば、世界全体の幸せにも近づけるんじゃないかと感じたのです。

さらに、学校の授業で世界の水問題について学んだとき、今も清潔な水が手に入らない国があると知って驚きました。JICAの人たちが、井戸を掘ったり、水道設備を整えたりしていることを知り、自分にできることは何だろうと考えました。今すぐ海外に行って何かすることはできないけれど、水を大切に使う、ごみを減らす、自然を守る、そんな小さな行動がまわりまわって世界の人の助けになるかもしれません。

ぼくがごみを拾っている姿を見て、誰かがまねをしてくれたように行動は広がっていきます。やさしさや思いやりの連鎖が、世界のどこかで困っている人を助けることもあるはず。将来は、自然や水を守る仕事に関わって、もっと大きな形で世界の幸せに貢献できる人になりたいです。

自分の幸せを大切にすることが、世界の未来を守る一歩になる。ぼくはこれからもその一歩を踏み出し続けたいと思います。

国際協力
特別賞

「伝える」力

〔長野県〕

飯田市立竜峡中学校 2年 白澤 美乃

「伝えることは微力だけど、それが世界を動かす大きな力になります」。私が、阿智村にある満蒙開拓平和記念館で平和について考えようと話しを聞きに行った際に頂いた言葉だ。この言葉に私は、自分の考え方を改めさせられた。

戦後80年という節目の年に、私は、満蒙開拓という歴史に向き合った。私の曾祖父が満蒙開拓団として満州に渡っていたという経緯があり、どんな歴史なのか興味があった。私は、日本は原子爆弾や空襲で大きな犠牲を払っており、「被害国」という見方があった。しかし、満蒙開拓という歴史を学んだことで、「加害国」としての側面があることを知った。世界に全面的に被害の歴史を訴えかけている日本に、他国の人を武力で追い出すという歴史があったことに深く衝撃を受けた。また、この歴史に向き合うことへの後ろめたさを感じ、自分が正しく伝えることができるのかすごく不安に思った。

そんな気持ちの私に、歴史を正しく「伝える」ことの大切さを改めて認識させてくれる言葉だ。私が伝えることで、一人でも多くの人の心に残ればという思いでいっぱいになった。ガイドをすることに對しても、ものすごく熱が入り、「多くの人に知ってもらいたい」という気持ちから、ガイド文を改めて読み直し、分からない部分の訂正を行ったり、不足している部分を補ったりした。また、誰もが聞き取れるようにゆっくりはっきり話すことを意識できるようにした。緊張すると話すのが早くなってしまい、何度も

何度も練習をした。始めは、難しかったが次第にできるようになった。来館者にガイドをした後、「分かりやすかったよ。ありがとう。」という温かい言葉をいただくと、自分のやっていることは無駄じゃない感じさせられる。「伝える」ということで、人の心に歴史を届けられているという達成感を感じた。

私は、自分の思いを「伝える」ことに抵抗があり、意見を言うことが得意ではなかった。しかし、私はこの出来事を通じて、日々自分の思いを伝えることで、現状を変化させる、大きな風を起こすことができると思った。近年、世界各地で戦争や紛争が激化し、平和とは逆方向へ歩み始めてしまっているように私は感じる。日本も戦争を始めないとは、断言できない。再び、戦争へと足を踏み入れる前に、私たち若者が歯止めをかけなければいけない。私達にできることは「伝える」だと思う。思い・歴史などを「伝える」ということは、大きな力を持つことを私は実感している。一人一人が、自分の思いを伝え、心から分かりあうことが出来れば、争いもなくなると思う。

私も、クラスの話し合いなどで自分の気持ちを伝え、一人でも多くの方がより良い学校生活を送ることが出来るようにしたい。また、日本を二度と戦渦に巻き込まないために、ガイドで満蒙開拓の歴史を伝え続け、一人でも多くの人に知ってほしい。

国際協力
特別賞

私の幸せな時間

〔静岡県〕

静岡大学教育学部附属島田中学校 2年 長谷 祐希

私は朝の光を浴びながら編み物をするのが好きだ。やわらかな光を感じながら編み物をして、完成した作品をネットで売る。その利益で毛糸を買い、また編む。それが私の幸せな日常だ。しかし、この当たり前の日常が戦争などによって突然奪われてしまったらどうだろうか。

幸せの形は人それぞれだが、誰もが共通して重要だと思うのは平和であることだと思う。私自身平和を望んでいるため、自分にできることを考えた。発展途上国で手芸を教え、私が仲介人となって作品を売り、新しい収入源にしてみよう。そんなアイデアが浮かんだが、今の自分にできることではなかった。寄付の存在は知っていたが、お金をあまり持っていない自分には関係ないと思っていた。

この考えが変わったきっかけは、ポーランドを訪れたことだった。滞在中、街でウクライナ難民の女性と話すことができた。戦争を遠い世界のことであった私にとって、現在進行形の戦争の現実を知ることは大きな衝撃だった。その後、美しい町並みと穏やかな雰囲気のある悲しい過去を知るため、アウシュビッツ収容所を訪れた。過去と現在、両方の戦争の現実を知ることで、平和の大切さをより深く実感した。

帰国後、私は世界が平和になってほしいとより一層強く思った。ポーランドでの体験を通して、世界の問題を自分事として捉えることができるようになったのだ。しかし、私に世界を平和にするような力はない。それでも、行動しなければ何も変わらない

い。小さなことでもいいから何か行動しようと決意した。そこで思いついたのが、編み物で得た利益の一部を寄付することだった。ポーランドでの体験が、寄付に対する思い込みを変えてくれた。その日から私は収入の一部を寄付するようになった。

商品が売れることで、私と買ってくれた人だけでなく、世界にいる誰かが幸せになってくれる。一回一回の寄付は少ないが、「塵も積もれば山となる」と信じている。そして寄付をするのと同じくらい、自分が幸せであることを重要視している。作品には作った人の思いがこもると考えるからだ。他の人に幸せを届けるには、自分が幸せであることが絶対条件だと思う。

この活動は直接世界平和に関係することではないかもしれない。しかし行動することが重要なのだ。自分のやり方で自分なりに世界を平和にしていけばいい。そんな考えの人が何十人、何万人と増えれば、きっと世界は平和になっていく。

今できる活動を続けながら、いつか世界中の人たちと、この取り組みを通じてつながれたらと思う。手芸の技術を共有し合うことで、お互いに新しい可能性を見つけられるかもしれない。それぞれの国の文化や技術を学び合いながら、共に成長していけるような関係を築いていきたい。

世界を変えるのは小さな行動の積み重ねだ。だから、私は今日も朝の光の中で編み続ける。一針一針に平和への願いを込めて、自分ができることから世界を変えていきたい。

『『いいね』よりも大切なもの』

〔滋賀県〕

立命館守山中学校 3年 山田 捺琴

パシャッパシャッパシャッパシャッ 店員さんに何の反応もせず、運ばれてきた料理をひたすら撮る大人の人たち。妹が「子どもの私たちでも『ありがとう』と言えるのに」と言った。私は「ほんとだね。だめだね。」と返した。その人たちが料理を撮り終えた後、どうするかなんて考えもしなかったのだ。

飲食店に家族と訪れたときの事。隣の席の人たちが、たくさんの料理を注文して写真を撮り、多くを食べ残して帰った。その光景はあまりにも異質で、今でも心に残っている。

私は、食べ物を残さないことを当たり前のように心がけている。なぜか、と言われても以前の私なら「お母さんにそう言われたから」としか答えられなかっただろう。しかし、今ならこう答えられる。

「それが『もったいない』からだけではなく、世界には十分な食べ物がなくて苦しんでいる人がいると知っているから」

日本では当たり前に見える「食べ物がある」日常。それは、世界中の誰にとっても当たり前ではない。ニュースや授業で、栄養失調で苦しむ子どもたちのことを学んだとき、私はやっと母が「残さず食べよう」と言ってきてくれた事の意味を理解した。私たちの当たり前が誰かにとっては貴重な日常であり、それを学べる機会も決して当たり前ではないのだ。

こうしている間にも、世界では4.25～12秒に1人が飢餓により命を落としている。恵まれた私たちにできることは何だろう。そう考えた時、私は気づいた。食べ物を大切にすること。無駄にし

ないこと。それも立派な行動の一つである。

今の時代、多くの人がSNSで自分の考えや行動を発信している。「こんな活動をしました」という投稿もよく見かける。もちろんそれ自体は素晴らしい事だし、誰かのきっかけになることもある。でも時々「それは本当に心からの行動なのか、それとも『誰かに見せるため』なのか」と考えてしまう。

私は思う。本当に大切なのは、「誰かに見せるための行動」ではなく「誰も見ていなくても続けられる優しさ」ではないのか。

例えば誰にも言われなくても食べ物を大切にすること。見えないところでごみを拾うこと。水を無駄にしないこと。そんな小さな行動が、やがて世界を変える力になる。

SNSで共感を得ることも行動を広げるきっかけとしては大事かもしれない。でも自分の良心に正直にいられることの方が大切だと思う。誰かの「いいね」より自分の中の「これでいい」という気持ちを大事にしたい。

世界の幸せのために、私にできること。それは、今までも、そしてこれからも「食べ物を無駄にしないこと」。そして、たとえ小さくても、正しいと思える行動をこれからも静かに続けていくことだ。

料理の写真だけを撮って、たくさん残して帰って行ったあの人たちにも、いつか「ありがとう」や「ごちそうさま」の意味を教えてくれる人が現れるといい。それが私から始まった小さな輪だったら、もっと嬉しい。

世界とつながる私たち フィリピンで感じた小さな一歩

〔京都府〕

京都市立大宅中学校 2年 佐野 心勇

この夏、ぼくはフィリピンのセブ島で行われた中高生キャンプに参加し、ポホール島のカカオ農園を訪れたり、スラム街の子どもたちと一緒に遊ぶボランティア活動を体験しました。現地で見えた景色や人々との出会いは、すべてが新しく、考えさせられることばかりでした。

特にびっくりしたのは、都会の中に高いビルがたくさん建っているすぐ近くに、スラム街があったことです。そこには、屋根や壁が壊れかけた家がぎっしり並び、裸足の子ども達が元気に走り回っていました。水や電気がちゃんと使えないと聞いて、「同じ国の中でこんなに生活が違うのか」と驚きました。

でも、そんな大変な環境の中でも、スラム街の子どもたちはとても明るく、笑顔でぼくたちに近づいてきてくれました。一緒に遊んだり、じゃれ合ったりする時間はとても楽しくて、忘れられない思い出になりました。最初は少し緊張していたけれど、遊んでいくうちに自然と仲良くなれたのがすごくうれしかったです。

カカオ農園のときも、大きな学びがありました。農園の人たちは朝早くから強い日差しの中で働いていて、手作業でカカオの実を収穫していました。チョコレート原料になるカカオがこんなふうで作られていると知って驚きました。農家の人たちはとても親切でぼくたちに笑顔で話しかけてくれましたが、その生活は決して楽ではないと感じました。日本では当たり前に見えるチョコレートも、こうしてたくさんの人の努力で作られているこ

とを知り、大切に食べようと思いました。

この体験を通して、発展途上国には、まだ学校に行けない子どもたちや、十分な食べ物も手に入らない人たちがたくさんいることを知りました。そして、その現実を知るだけではなく、自分にできることを考えることが大切だと思いました。

ぼくがすぐにできることは多くないかもしれませんが、でも、まずはこの体験を家族や友達に話すことが、ぼくにできる小さな一歩だと思いました。そして、将来もっと国際協力について学び、いつか困っている人たちの力になれるような仕事に関わりたいと思うようになりました。「世界とつながる」ということは、遠い国のことを他人事と思わず、自分のこととして考えることだと思います。小さな一歩でも、何もしないよりずっと大きな意味があると信じて、ぼくはこれからも行動していきたいです。



フードロスと飢餓

〔徳島県〕

阿南市立羽ノ浦中学校 2年 原田 夏帆

『ぼくがラーメンたべてるとき』という絵本を読んだ。ぼくがラーメンを食べている時、隣の国では子どもが赤ちゃんの世話をし、またその隣の国では、水くみをしたり田んぼで牛をひいたりしている。そしてその隣の国では、子どもが倒れて動かない……私が冷房の効いた部屋でおやつを食べながら本を読んでいる間にも、どこかの国では命の危険に晒されている子どもがたくさんいるのだ。

日本では、フードロスという言葉を目にする。コンビニで、売れ残った恵方巻やクリスマスケーキが廃棄されているニュースは、何度か見たことがある。農林水産省のホームページによると、食べ残しの量は、1人当たり毎日お茶碗一杯分を、捨てているそうだ。その反面、連日報じられているのがイスラエルのパレスチナ自治区ガザの危機的状況だ。飢饉が発生し、子どもの約3人に1人が栄養失調に陥っているそうである。しかもそれは人災によるものだ。ニュース映像で、骨と皮になった人たちが映し出されていたが、どうしてこのような残酷なことが起きるのだろうか。

私の母はインド人ファミリーと仕事をしている。手作りのインド料理をいただいたり、インド土産のお菓子をいただいたりした。とても好意的で優しい人たちだ。それまでのインドのイメージと言えば、失礼ながら、汚いとか怖いというイメージだった。それは動画サイトなどで流れてくる内容が影響しているのだろう。インド旅の動画では『こんなにもたくさんの危険があった』と、

おもしろおかしく語られている。それは、ほんの一部のことであるかもしれないのに、それが全てのように錯覚してしまうのだ。悪い部分だけ切り取るのは良くないと、改めて思う。そこには最初から、偏見の目があるように感じる。

偏見を持たないために私たちにできることは、まずは相手を知ること。お互いの気持ちを語り合い、理解し合う。決して、自分だけが正しいと考えてはいけない。自分にできることは、ほんのささいなことかもしれないけれど、正しい知識を持つことは大切だ。

私はこの夏に、忘れられない言葉に出合った。『被爆80年 長崎平和記念式典』で鈴木市長が平和宣言で何度も口にされていた「地球市民」という言葉だ。地球市民とは、同じ地球に住む一員であることを自覚し、国境や人種を超えて地球上の問題を考え解決していこうとする意識をもった人のことを言うそうだ。地球の海はつながっている。空もつながっている。私たちはかけがえのない地球に住む同じ人間だ。いつまで地球があるかも分からない。私たちは争っている場合ではない。大それたことではなく、安心して暮らせる住まい、温かいごはん、清潔な衣服。これだけで良い。これらが当たり前で持てる世の中になればいい。そのために周りで起きていることは他人事とは思わず、様々なニュースに目を向けて生活していきたい。まずは知ることから始めよう。



ホームを救うために

〔海外〕

Garden International School Kuala Lumpur 1年 高橋 聡太郎

ぼくにとっての幸せとは「ホーム」があることだ。ぼくにはホームと呼べる場所が三つある。今暮らしているクアラルンプールは、大好きな学校があるホーム。日本は心のふるさとのような場所。そしてもうひとつ、昨年まで三年間を過ごしたジャカルタも大切なホームだ。一生忘れることのできないたくさんの思い出がある特別な場所だ。

しかし、そのホームが今、消滅の危機にある。ジャカルタは深刻な地盤沈下が進んでおり、2030年までに北ジャカルタの90%以上が海に沈んでしまうと言われている。ぼくが通っていた学校付近にもその危険が迫っている。主な原因は、地下水をくみ上げ過ぎていることだ。水道設備が全く足りていないため、多くの人が地下水に頼って生活せざるを得ないのだ。

街が沈むなんて、まるで都市伝説のようだが、インドネシア政府が首都をカリマンタン島へ移す計画を急ぐ理由のひとつでもある。本当に首都が移転したら、ジャカルタは見捨てられてしまうのだろうか。ぼくが過ごしたかけがえのない時間が、海の下に沈んでしまうなんて絶対に嫌だ。活気ある都市ジャカルタは、これからアジアを動かす、日本のよきパートナーでいてほしい。

実は同じ問題が、過去に東京でも起こっていた。工業用水や生活用水の地下水採取を規制したことで、今は地盤沈下を防ぐことができている。他にもバンコク、マニラ、ホーチミンなどが同じ問題を抱えている。地下水にたよらずに生活するためには、

水道設備を整えることと水源の確保が必要だ。例えばシンガポールでは下水からリサイクルする高度な技術が進んでいるという。同じ問題を経験している人々が互いに協力し、周辺国からも知恵を出し合って取り組むことで、沈んでいく街を救うことができると思う。

ぼくたち中学生にもできることがある。地盤沈下に加え、地球温暖化が海面を上昇させ、都市の沈下に拍車をかけている。ゴミを分別すること、節電・節水を心がけること、公共交通手段を使うこと等、地球温暖化を防止する意識を高めることで時間を稼ぐことができる。そして、海に沈む都市の問題を学び、発信することで、より多くの協力を得ることができれば、現状を変えられるはずだ。

この場所も、あの場所も、きっと誰かにとっての「ホーム」だ。ホームは幸せの原点。どこであっても、人々の特別な想いやつながりがある場所が沈んでしまうのをゆるしてはならない。ぼくは、ぼくの大切なホームを守りたい。そして誰かのホームを守るために協力したい。そのためにこれから学び、考え、できることを継続しようと思う。



主観から未来へ

〔石川県〕

金沢大学人間社会学域学校教育学類附属高等学校 2年 橘 葵衣

私は今、十一月にブラジルで開かれるCOP30に参加する予定だ。高校生である私が国連の気候変動会議に出席できるのは、国連大学のプログラムを通じて環境問題に向き合ってきたからだ。最初は「自分にできることなんて小さい」と思っていたが、能登半島地震での被災体験や、インドネシアでの交流を経て、「小さな主観の積み重ねが世界を変える」という確信を持つようになった。

能登地震の後、私は水の研究に没頭した。珪藻土を使ったろ過実験で、水の色や成分が少しずつ変わっていく様子を顕微鏡で確かめる作業は地味だが、そこには確かな手応えがある。災害時に役立つだけでなく、世界中で安全な水を必要とする人々にもつながるかもしれない。その研究成果を地域の人に話したとき、「能登での経験が、世界の水問題とつながっている」と気づいた。

ただ、科学だけでは届かないものがあることも知った。インドネシアの孤児院を訪れたとき、私は最初「与える側」だと思い込んでいた。しかし、子どもたちと折り紙を折り、日本の唐揚げを分け合って食べたときに気づいた。私が一方的に「与える」より、同じものを囲んで笑い合う時間のほうが、よほど心をつなげていたのだ。特に、子どもたちと机を囲んで一緒に食べたおにぎりの味は忘れられない。硬く乾いた米粒だったが、みんなで笑いながら食べると不思議と温かかった。幸せは与えるものではなく、共に分け合うものだ、あのおにぎりが私に教えてくれた。

その一方で、同じインドネシアでも別の地域では「宗教上の理由でこれは口にできない」と言われ、驚いたことがある。私にとってはただの食べ物でも、相手にとっては信仰と結びついた意味を持っている。さらに話を聞けば、同じ国の中でも地域や家庭によって考え方は異なることも分かった。国が変わればなおさら、宗教や歴史、文化、生活習慣といった背景が違い、それぞれの主観を形づくっている。誰かにとっての当たり前

が、別の誰かにとっては大切な信念やタブーになる。その多様性に触れたとき、私は「主観こそが課題を考える出発点なのだ」と実感した。

国連大学のプログラムでは、各国の高校生が集まり、環境問題について議論した。水不足を「農家の効率化」と語る人もいれば、「文化の継承」と結びつける人もいた。客観的なデータやSDGsの指標は同じでも、主観の違いによって導き出される答えは大きく異なる。私はそこにこそ未来を切り開く力があると思った。

地域のNPOでも、私は「学びの個別最適化AI」を推進する活動に関わった。発達特性のある子どもや、家庭の事情で学びに遅れがちな子が、自分のペースで学べるようにAIを活用する取り組みだ。誰一人取り残さない教育を探る中で、子どもが自分の“主観”を大切にしながら学べる環境をつくるのが、未来の社会に直結すると実感した。また子ども食堂で、地域の大人と子どもたちが一緒に食卓を囲む場面にも同じ力を感じた。そこには数字では表せない「安心」や「居場所」があった。

世界の幸せを考えると、客観的なデータや国際的な目標はもちろん大切だ。しかしそれだけでは人の心は動かない。大切なのは、自分の体験や感情という主観を差し出し合うことだ。主観があるからこそ共感が生まれ、共感があるからこそ行動が広がる。能登の地震で感じた不安、インドネシアと一緒に食べたおにぎり、宗教的背景から見えた違い、研究で見えたわずかな水の透明度の変化、そして地域での子どもたちとの学び。これらはすべて私の主観だが、それを語り合うことで他者と未来を結びつけることができる。

COP30では、世界各国の若者と共に議論する。私はそこで「科学的な客観性」と「自分自身の主観」を重ね合わせ、世界の幸せをどう編んでいけるかを考えたい。



「地域とともに築く健康」

〔北海道〕

市立札幌開成中等教育学校 4年 萬谷 いちる

私は看護師の母の影響で、幼い頃から医療や健康に関心を持っていた。小学3年生のときに読んだマザーテレサの伝記が、世界には予防できる感染症や健康問題で命を落とす人々が多く存在することを知る契機となり、途上国の健康問題に関心を持った。そのため、中学入学後は、タンザニアで医療・健康支援を行うNPO団体の活動への参加や、日本の病院でのボランティア、募金活動などを通して、医療格差とその解決に向けた方法を模索してきた。しかし、活動を続ける中で、「一時的な物資支援は、根本的な問題解決になるのか？」という疑問が生まれた。持続可能な支援のあり方を考えるうちに、一方的な支援ではなく、現地の人々の生活や価値観を尊重し、地域と協力して健康を築くことが大切なのではないかと考えるようになった。その思いから、今年の夏、約2か月間タンザニアに渡航した。現地では、まず地域の人々に手洗いの際に石鹸を使用するかなど健康意識調査を行ったが、日本人と大差なく、健康意識は高かった。一方で、水道がある場所でも石鹸が置かれていないことが多く、意識はあっても実践できない状況が課題であると知った。また、マサイ族の子どもたちが通う幼稚園では、水や電気のない児童の住居を訪問した。幼稚園の先生の協力を得ながら、マサイ語で行ったインタビューでは、「一日一食しか食べられない」「経済的に厳しく、服や石鹸を買う余裕がない」という家庭が多いことが分かった。こうした中で、少しでも手洗いを習慣化できる方法は何か考え、キッチンペーパーと石鹸を使った紙石鹸作りのワークショップを行った。幼稚園ではリキッドソープを子ども一人一人に提供することは難しくとも、数十円で購入可能なキッチンペーパーにソープを塗布して乾かすことで、低コストで持ち運び可能な簡易石鹸を大量に作ることはできると考えた。実際に3~4歳の子どもたちと作成してみると、泡立ても簡単に、楽に使うことができた。何回か作成すると材料を渡

すだけで子供たちが自主的に作成・使用できるようになり、帰国後も、現地の先生から「紙石鹸また作ったよ」と動画が届くなど、手洗い習慣の定着が見えてきている。また、町では子どもたちが野菜や果物の販売、畑仕事をしている様子が多く見られる。最初は「児童労働では…」と思ったが、街頭調査から野菜や果物の栽培・販売は日本より一般的なことなのだとわかった。そのため、プラスの側面からそれは彼らの“生活力”でもあると考え、子どもたちと一緒に畑を作り、飼育している鶏の糞からできた堆肥で野菜の苗を育てる活動を行った。タンザニアでは子供を中心に深刻な栄養失調問題が今も見られる。その中で、食料の配給ではなく、地域資源と子どもたちの生活力を活用した、彼らの生活スタイルに合う持続可能な健康づくりに取り組んだ。更に現地の病院のNICUの医師に聞き取り調査を行うと、健康課題以前に、母親が育児と就労の両立が難しく貧困に陥るケースが多いことを知った。そこで、母親の就労と育児支援を両立できる施設の必要性について医師と話し合い、地元の観光客向けにコーヒーを高値で販売し、その差額を支援資金に充てる仕組みを考案した。観光地では、訪問者に向けて、やや高額での販売は一般的で、値段設定も地域住民の理解のもとで進めている。これは地域の特産物の強みと健康課題をつなぐ、地域完結型の新たな支援システムへの挑戦だ。最後に、このタンザニアでの経験から、私は「支援は与えるのではなく、共につくるもの」だと実感した。高校生の私には、病気の治療資格も資金もない。けれど、地域の人々と協力し、その土地に寄り添った支援の形を模索することはできる。小さな一歩でも、自分にできることから行動に移すことで、幸せな生活の基盤となる持続可能な健康づくりに関わることができると、それがわたしにとっての幸せでもあることを強く実感した。



小さな行動がつなぐ、世界の子どもの笑顔

〔福島県〕

福島県立福島南高等学校 1年 高橋 優衣

私は、大学生の姉からベトナムの山岳地帯ランピンで撮られた写真を見せてもらいました。そこには、十分な机や教室が整っていない環境で、それでも懸命に学ぶ子どもたちの姿がありました。民族や言語が入り混じるこの地域では授業の合間に子どもたちが鬼ごっこをしたり、民族舞踊を楽しんだりしていました。はじけるような笑顔は、困難な環境でも助け合いながら生き抜く力を映し出しているように感じられ、私は強く心を動かされました。

姉は、ベトナムの教育支援団体の活動に参加しています。私は姉の話を通して、教育環境に恵まれない子どもたちの現状を知りました。文字が読めない子がいること、学校まで遠く通うのが大変な子がいること、日本にいては想像できない現実が、そこにはあります。それでも子どもたちは夢を持って学び続けています。「将来の夢は大人になることです」という子どももいます。病気や地雷で命を落とすこともある中で、生き抜くこと自体が夢になるという事実には、私は衝撃を受けました。

姉の活動や現地の子どもの話を聞き、私も自分にできることはないかと考えるようになりました。そこで学校の友人と相談し、不要になったクリアファイルを集める活動を始めました。福島市のSDGs推進企業で、回収した不要なクリアファイルを換金してくれる仕組みがあると知り、その制度を利用して寄付することにしました。私はポスターを掲示したり、クラスメイトに呼びかけたりして、学校に回収箱を設置しました。さらに駅前の商店街でも協力をお願いしたところ、予想以上に多くのファイルが集まりました。活動をSNSで発信すると福島県外からも「協力したい」という声が届きました。友人や先生方、地域の方々など、多くの人々に支えられながら取り組みが広がっていったことに、大きな喜びを感じました。この活動を通して、ベトナムの子どもの現状を周囲に知ってもらえたことは、私にとって大きな喜びでした。身近な行動が、国際的な支援

につながることを実感し、SDGsの理念を頭で理解するだけでなく体験として理解できたのです。

寄付金は現地の学校のトイレ建設費の一部として使われました。以前は、女子生徒がトイレを我慢して体調を崩し、通学が難しくなることもあったそうです。完成したトイレの写真には、安心して学べる環境を得た子どもたちの笑顔がありました。自分たちの小さな行動が、遠く離れた子どもたちの生活を少しでも改善できたことを知り、私は「誰かの力になれるのだ」と実感しました。

現在、現地の女子生徒たちは裁縫を学び、ベトナムの伝統布を使った小物を販売する計画を立てています。カラフルで模様も美しい布で、作られた製品には、他にはない魅力があります。私はぬいぐるみのデザインを考えることに、一緒に関わらせてもらっています。中には、こぶたのぬいぐるみもあり、とてもかわいいです。かわいそうだからではなく、「素敵だから買いたい」と思えるような商品づくりを目指しています。ある女の子は「日本語も勉強したい」と目を輝かせながら語ってくれました。彼女の両親は、ベトナムの首都ハノイへ出稼ぎに行っていて、障害のある祖母を介護しながら二人暮らしているそうです。それでも未来への希望を失わずに頑張っています。その姿に胸を打たれました。姉は仲間とともにSNSでの広報や販売の効果的な方法を考案しています。今後も私はこの活動に関わり続けたいと考えています。

これらの体験を通して、私は小さな行動が世界の子どもの未来につながることを学びました。そして、学ぶことは自分や誰かの未来を支える大きな力になるのだと改めて実感しました。これからも、自分にできることを見つけ、学びを重ねながら、世界の子どもの笑顔を広げる一歩を歩み続けていきます。



タンザニアから見つめた幸せの鍵

〔群馬県〕

ぐんま国際アカデミー高等部 2年 齋藤 花ノ舞

「生まれてきてくれてありがとう」

そんな眼差しで出産を終えたお母さんが、差し出された子どもをひしと抱きしめた。これはタンザニアの医療インターン中、病院で見た光景だ。固く冷たいベッドの上で震えながらも、赤ん坊の温もりを感じ笑みを浮かべている母親の姿は幸せそのものだった。しかし同時に、この家族の未来が頭をよぎった。果たしてこの国で安全に暮らせるのだろうか。この病室に来るまでに、栄養失調や感染症に苦しむ人々を何度も目にした。だからこそ、この家族も同じような道をたどるのではないかと考えてならなかった。

国境なき医師団に所属し困っている人に医療を提供するという夢を持っている私だが、それだけで人々の末永い幸せに繋がるのか疑問を持つようになった。言うまでもなく、必要なのは医療だけではなかった。人々を苦しめている根本的な原因は水汚染や水不足、つまりインフラの未整備だと観察して気づいたのだ。そして、先進国の支援に頼るのではなく、発展途上国自身が知恵を絞り、自立的に改善していくことで初めて解決に向かうことも学んだ。

タンザニア渡航から一年、インフラ整備の一歩としてYouthTICADに参加し「コンポストトイレによるアフリカの公衆衛生改善プラン」を練り上げた。このビジネスプランは、分泌物をセメントや肥料に再利用・販売し、現地の人々が主体となって運営する仕組みだ。2023年時点で安全なトイレにアクセスできていない死傷者・アフリカ地域の人口は半数を占め、数え切れぬほどの病気や死を招いている。しかし、この仕組みを導入することで負の連鎖を断ち切ることができる。アフリカのみならず、日本でも七割以上の自治体が管理できていないと答えた災害時のトイレ設備にも貢献する。日本市民に災害時の携帯トイレ使用方法について教育することで、災害関連死を防ぐことを目指す。「不幸」と聞いて多くが想像するの

は、貧困で苦しむ土地かもしれないが、地震の多い日本のように、平凡な日常にいきなり不幸な出来事が降り掛かってくることもある。私はどちらかでも解決し、被害を防ぎたい。そのために互いの知識を共有し協力することが、尊い命を守る、幸せに近づく一歩なのだと思っている。

私はこうして目標に向かって挑戦する機会を与えられていることを幸福に感じる。もちろん大きな壁は必ず訪れるが、第一にタンザニアに巡り会えたこと、協力してくれる仲間を見つけられたこと、全力で応援してくれる人がいること、人との繋がりがあったからこそ感謝できる自分がある。渡航前までは、自分に否定的だった。できないことに目を向け、失敗ばかりを気にしていた。しかし、今は自分という存在をより深く理解し、他人と自分を割り切れるようになった。異文化体験を通じ、周りが自分と全く違う背景を持っているから、「自分は自分」と受け入れられるようになった。タンザニアの人々は貧困ながらも、サッカーやダンスなど自分が純粋に楽しいと思うことに満面の笑みを浮かべながら過ごしていたのが印象的だった。今私達に必要なのは、比較するというツールを自分の味方につけることだ。相手を蔑むのではなく、自分と相手を一人の個性あふれる存在として見ることで。

そうするためには、色々な人と触れ合い、観察して、何を幸せと捉えているのか、どんな生き方をしているのかを知るところから始まる。自分が幸せだと気づく時は、地位や能力を保持しているかよりも、自分の中で世界の見方が変わったときなのかも知れない。私がアフリカのために行動してやっと幸せを感じられたように、自分の幸せは世界の幸せと切り離せないものなのだと思う。

私達が世界の幸せのためにできることは、まず周囲の出来事を知り、どんなに良い結果を出せたとしてもそれで終わらず学び行動し続けること。幾度と訪れる「出会い」を大切に、私は今も歩み続ける。

優秀賞

「言語学習でつなぐ心」

〔東京都〕

聖心女子学院高等科 2年 中島 知葉

「インドの人たちはみんな英語が話せるんでしょ？」

以前の私は、そう思い込んでいた。映画やニュースの中で流れる流暢な英語、IT企業で活躍するインド人の姿。それがインドの「普通」だと思っていた。現に、アジアの学生たちと交流するオンラインプログラムでは、インドの学生たちは訛りがありながらもとても流暢な英語を話していた。

私は、海外経験がないながらも中学生の頃から日々着実に英語の勉強を進め、今では日常会話であつたらネイティブスピーカーともほとんど不自由なく話せるくらいになった。英検などの資格試験にも合格した私は、自分の英語力に自信をもつようになり、同じように英語学習に励んでいる人の力になろうという思いで昨年から学生団体に入り、小中学生に無料で英会話レッスンを提供している。活動の一貫で、インドのスラム地域の子供に英会話を教えるというプロジェクトも始めた。「インドの人たちはみんな英語が話せるんでしょ？」

私が冒頭で書いたこの思い込みはここであっけなく崩れることになる。画面越しに出会った子どもたちの多くは、学校に十分に通えず、英語を学ぶ機会を持っていなかった。英語を話せないことで、進学や就職の選択肢が限られ、未来が狭められていくため、なんとかして英語を話せるようになりたいということだった。インドは「英語ができる国」なのではなく、「英語を学べる人と学べない人の差が大きい国」だった。教育の格差が、そのまま将来の格差に直結していることを、子どもたちとの出会いから痛感した。

そしてこの気づきは、私に新しい問いを投げかけた。「教育や言語の壁を前にしたとき、私にできることは何だろうか？」

その問いに対する一つの答えとして、私は言語学習アプリの開発を始めた。SDGsの目標4「質の高い教育をみんなに」を意識し、難民や移民を含む誰もが安心して学べる仕組みをつくりたいと思ったからだ。アプリの特

徴は、利用者が「先生」と「生徒」の両方になれることだ。母国語を教えて、他者の言語学習に貢献することもでき、自分が新しく言語を学ぶこともできる。与えるだけでも、受け取るだけでもなく、「学び合う」仕組みになっている。言語は単なるコミュニケーションの道具ではない。自己表現の手段であり、他者とのつながりを築く架け橋だ。しかし言語の壁があると、人は簡単に孤独になり、社会から疎外されてしまう。だからこそ、互いの言葉を教え合うことは、ただの言語学習ではなく、「あなたの存在を認めている」というメッセージになる。

ボランティアで出会ったインドの子どもたちのまなざしを思い出す。拙い英語の単語を声に出した瞬間、彼らの顔がぱっと明るくなる。その表情は、知識を得ただけでなく、「学べた」という自信を得た証だった。教育は、可能性への扉を開く力だ。だからこそ、その扉が経済的な事情や社会的な壁によって閉ざされてしまうことは、あまりにも不公平だと感じる。私は、国際協力とは一方的な「支援」ではないと思う。与える側と与えられる側に分かれてしまつては、そこに上下関係が生まれてしまう。本当に必要なのは、「互いに教え合い、学び合うことで共に成長する関係」だ。アプリを通じて目指しているのは、そうした「相互学習」の場を世界中に広げることだ。格差を埋めるのは、上からの支援ではなく、横につながる協力だと信じている。誰かの母語が、別の誰かにとっての学びになる。その循環の中で、人々是对等に尊重される存在になる。私はその仕組みづくりの担い手になり、それこそがこれからの国際協力の形だと思う。

私たちが本当に「対等」だと胸を張って言えるのは、誰もが学ぶ権利を持ち、言語や国籍を超えて夢を語り合える社会を実現できたときだ。その日を目指して、私はこれからも学び続け、挑戦を重ねたい。教育の格差や言語の壁を超え、誰もが未来を描ける世界へ。インドの子どもたちが見せてくれた笑顔を思い出しながら、私はその実現を信じている。

優秀賞

「勝つための技術」から、「共に生きる技術」へ

〔滋賀県〕

立命館守山高等学校 3年 渡邊 幸大朗

「技術は、人の可能性を解き放つ」

技術者としての経験から、子供達が技術と課題解決力を手に自ら未来を創る、その連鎖が起こる「幸せな世界」を私は創りたい。

幼い頃からロボット制作の沼にハマリ、高校2年では全国・世界大会で優勝した。表彰台でトロフィーを掲げた瞬間、積み上げてきた「技術」が世界に認められたと全身で実感した。しかしその数日後、滋賀県副知事からの「その技術は社会でどう活かせるのか」という問いに対し、私は答えられなかった。積み上げてきた技術が「誰の、どんな課題」を解決し得るのかという視点でモノづくりに向き合う観点がなかったことに気づかされ、この一言は、自分の高めてきた技術の意味を根底から問い直し、私に「技術と社会の関係」を深く探究するきっかけとなった。

最初に訪れた場所は、カンボジア第二の都市であるシェムリアップである。至るところに整備されたWi-Fi、タブレット端末を手に学びを広げる子供達など技術革新の恩恵が見受けられた。その一方、農村部では栄養失調の子や文字が判別できない黒ずんだホワイトボード、狭い教室に収まりきらない生徒たちが学ぶ光景があった。出逢った少女は「先生になりたいが、授業が二部制で十分理解できない」と語り、同国内で学びの基盤すら欠ける子供と、多くの可能性を選択できる環境を持つ子供とが隣り合うという格差を体感した。その光景に衝撃を受け、世界の幸せとは「誰もが未来を選べる自由」を持つことだと強く感じた。

私は、未来を選ぶ自由を持ってない子供たちの力になりたいと思った。模索の途中で思い出したのは、自分が日本で開いてきたロボット講座だった。初めて機体が動いた瞬間、子供たちの瞳に宿る光を私は何度も見てきた。だからこそ、カンボジアでも同じような場をつくれれば、彼らの可能性を開くことができるのではと考えた。私は構想を練る中で、タンザニアで

ICT人材育成を行うPowering Potentialの事例を参考に教育プログラムを考案した。しかし調査を進める中、大学教授から技術格差を助長する恐れを指摘され、一極集中や再分配不全といった構造課題を強める可能性に気づいた。確かに私の案は機会提供にはなるが、電力不足もあり農村で能力を活かせず人材は都市へ流出しやすい。この気づきから、私は「教育だけでは世界の幸せに直結しない」と理解し、当事者が課題解決力を育み地域に還元できる体制の必要性を考えるようになった。

その後、フリー・ザ・チルドレンや世界銀行職員に聞き取りを行い、南アフリカのGWFによる「Open Learning Academy」に興味を持った。これは、ロボティクス教育でICTスキルと課題解決力を育て、地域出身者を職員に登用することで循環を生んでいた。その仕組みは内側から未来を紡ぐもので、私は強く惹かれた。一方、成功の背景にはICT産業の急速な成長と投資の集積があり、カンボジアにはその土台がない。教育の弾圧や制度の脆弱さも重くのしかかっている。私はそこで学んだ。教育モデルは輸入できても、社会の土壌までは移植できない。教育とは、その土地に根を可能性を掘り起こす営みなのだ。

だからこそ、私は単に「カンボジア版」を実行するのではなく、現地の農村地域に即したICT教育モデルを追求したい。具体的には、ロボティクスを学べる小規模ラボを設立し、プログラミングや電子工作などの基礎から、地域の農業・生活課題を題材にした実践的プロジェクトまでを学べるカリキュラムを整備する。こうした教育を受けた人材が地域に残り、次世代を指導できる体制を築くことで、持続的に課題解決力を循環させたい。

「勝つための技術」から、「共に生きる技術」へ。言葉にすれば、世界を動かす力になる。私の言葉は、次の行動の約束だ。

近年注目され、多くの国と地域で取り組みがなされている「SDGs」。2030年までに解決すべき目標が17個にわけられているが、その中でも2「飢餓をゼロに」という目標は、私が特に取り組むべき目標だと考えている。

私は現在、北海道の農業高校で日々、フィールドワークを通して畜産について学んでいる。そのような私であるが、出身はさいたま市である。畜産が身近にない環境から単身、北海道の農業高校に進学した理由は、「世界に通用する人」になるためである。人間は食べることができないと活動することもできない。よって食べ物を生産する農業、畜産は地球上において最も大切な産業であり、世界中どの国と地域でも必ず行われているものだ。そのような農業、畜産を学ぶことで「世界に通用する人」になれると考え、北海道の農業高校に進学した。

高校で畜産について学ぶ中で、日本の畜産業は世界でもトップレベルの品質と技術を誇り、畜産業はかなり充実していると感じた。高校二年生のある日、酪農雑誌を読んでいると、フィリピンで酪農を営む日本人夫婦の記事を読んだ。フィリピンの酪農は、日本先進的な酪農とはかけ離れているもので、生産量も少ない。だが、人口は増え続けている現状にあり、牛乳を飲む人が今後増えることが約束されている。この記事を読んだことをきっかけに、日本とは違う開発途上国の畜産に興味を持ち始めた。

開発途上国の畜産について調べる中で、JICAの畜産に関する取り組みを発見した。その中で、開発途上国で畜産を営み、高栄養価な畜産物を生産することは、飢餓の根絶に貢献するものであるほか、経済発展としての役割を担うものであり、人間の安全保障につながるものである。この言葉が強く印象に残った。また、開発途上国では飢餓による子供の

死亡率がいまだに高いことを知った。高校で食料生産を学ぶ中で、食料があることの大切さを感じた私は、開発途上国での貧困による飢餓がいまだに多くあることは最大の課題だと考えた。そこで畜産を学んだ私ができることは、飢餓を根絶するために開発途上国で畜産を広めることだと確信した。

具体的にどのように貢献していくか。私は飼料作物の分野から貢献していきたいと考える。畜産物を生産する家畜も、食べ物がなくて生産することができない。家畜の食べ物となる飼料を充実させることが大切だ。実際に青年海外協力隊でパラグアイでの活動をした高校の先生も、開発途上国の畜産についての飼料給餌体系は未発達な部分が多いと言っていた。そこで、高校では暖地型飼料作物について研究し、将来の開発途上国での活動に向けた経験を積むことにした。ほかにも、開発途上国で活動していくために国際的視野を養っていくことが必要であると感じた。そのために、ニュージーランドとオーストラリアにおいて農業実習を経験した。世界のどの地域でも農業がおこなわれているということを目で確認するとともに、異文化を尊重する意識や人と積極的にかかわろうとする参画性を養った。

これから農業系大学に進学し、暖地型飼料作物の知識をさらに深めるとともに、開発途上国を実際に訪れ、自分の目で開発途上国の畜産の現状を確認していきたいと考えている。大学卒業後は青年海外協力隊に参加し、培った経験を畜産復興に最大限活用していくつもりである。飢餓を畜産の力によって根絶させ、本当の世界の幸せを実現することが私の目標だ。

最近、私は「アイデンティティってなんやろう?」という問いが思い浮かぶことが多い。

問いの発端は私の耳が聞こえないことにあると思う。日々の生活や学校生活の中で、「どう生きていきたいか」を考える場面が、人より少し多かったのかもしれない。聞こえない人には、読唇術、手話、筆談などさまざまなコミュニケーション手段があるが、私が一番大切にしているのは手話だ。

手話の大切さに気づいたのは、普通学校に通っていたときの経験がきっかけだ。普段なら私は相手の口の動きや表情を手がかりに会話の内容をほぼ理解できる。しかし、中学一年生の時、新型コロナウイルスの影響でマスクの着用が義務付けられ、口の動きが見えなくなった。先生の説明も、友達の言葉も、何を話しているのかわからなくなった。そんな日々が続く、次第に孤独を感じるが増え、自分の存在を否定してしまいそんな気持ちになった。そのとき改めて、手話で会話できる環境がどれだけ安心できるかに気づいた。

家では聞こえない家族と自然に手話で会話できたが、学校では手話を使うことができなかった。もし周囲の生徒や先生が手話を使えるようになれば、もっと気持ちを伝え合えるのではないかと。聞こえない私にとっても大きな幸せだと強く思うようになった。

ろう学校に転校したことで、私は自分の思いを素直に表現できる場所を得ることができた。私は授業の情報を十分に得ることができ、学習への意欲を取り戻し、自分に自信を持つことができた。自分の思いを手話で自由に表現することが、私にとってのアイデンティティの核になったのだ。そして「手話を通して他者と心を通わせられる」ことに幸せを感じたのだ。次第に世界の人も交流したいと考えるようになった。

挑戦したのは、高校生の海外留学を支援する取り組み「トビタテ!留学JAPAN」だ。ろう者として海外に行き、手話や文化を学びたい。そして世界

中の人と交流し、学んだことを将来に生かしたい。そんな思いを込めて応募し、合格したときの喜びを今も鮮明に覚えている。しかし、現実思った以上に厳しかった。いざ準備を始めると、現地の政治情勢の混乱によって、ホームステイを受け入れてくれる家庭も、学校や施設も見つからず、計画は行き詰まり、留学は頓挫した。努力してきただけに、その現実とはとても悔しかった。

けれども、この経験を通じて得たものはあった。それは留学準備の中で、自分の夢や将来について深く考えて、家族や先生、友人と話し合い、自分の気持ちを整理できたことだ。何よりも、挑戦は一度きりではなく、次につなげることが大切だと思えるようになったことが大きい。

この経験を胸に、私は次の挑戦を考えた。それは海外のろう学校で手話を使って交流することだ。互いの文化や生活を紹介したり、日本のろう学校の一日の様子を紹介したりしたい。交流の中で自分の思いを手話で自由に表現し、それが届く喜びを共有できるはずだ。

手話は単なる身ぶりではなく、私たちの想いを結ぶれっきとした言語である。手話を使えば、自分の考えを正確に伝えることができる。相手としっかり気持ちを通わせられる言語があることは、人のアイデンティティを作る大切な要素になると思う。私は手話があったからこそ自分はいまのままの自分でいいんだと思えるようになった。そして、手話を通して他者と心を通わせたとき、幸せを感じる。同じ思いをする人は世界にたくさんいるに違いない。だからこそ、手話で学びを共有し、文化を伝え、世界中で「自分らしく生きられる」人を増やしていきたい。

私にとっての幸せは、手話で自分の思いを表現し、相手と気持ちを通わせることだ。だから私はこれからも手話でつながる活動を続ける。小さな積み重ねかもしれないが、手話で人と人をつなぎ、互いのアイデンティティを認め合うことで、世界の幸せを少しずつ広げていきたい。

審査員
特別賞

私の小さな挑戦 ～アオザイのアップサイクルで繋げるよりよい未来

〔静岡県〕

静岡学園高等学校 2年 栗下 琴音

夏休みを利用したベトナムでの海外研修が決まって、さてこの海外研修で私に何が出来るだろうと自分に問いを立てたとき、スリランカのサリーをアップサイクルしたエコバックが真っ先に思い浮かんだ。昨年度、このエッセイコンテストの副賞でいただいたものだ。このエコバックが届いた時のことは忘れない。やわらかい生地がたくさん刺繍、ほのかに漂う異国の香りに心が踊った。今では私の大切な宝物だ。タグに書かれた名前は、かつてこのサリーを着ていた人だろうか、それともサリーからエコバックに変身させた人だろうか。遠いスリランカという地に思いをはせて、ドキドキした。

アップサイクル…不要になったものや捨てられるはずのものに新たな価値を与えて再利用すること。しかもこのサリーのエコバックは、ただのアップサイクルではない。伝統衣装・伝統文化を守りながら別の形に作り替えてものを大事にしている。さらに、作り手は教育を受けられなかった立場の弱い女性たちだという。彼女たちに就労の機会を生み、その収入は彼女らの子供の教育資金になるのだ。教育を受けた子供たちは搾取されない人生の選択肢を得ることが出来るだろう。望まない結婚を強いられることにNOと言えるかもしれない。自分で自分の未来を切り開く第一歩につながる、なんて素敵なサイクルだろう。私自身、ひとり親家庭で育った経験から、女性の貧困問題やそこから波及する子供の教育格差や貧困の連鎖という社会問題にとっても関心があった。私は、社会問題はモノやお金ではなく、技術やシステムによって解決すべきだと考えている。その点で、スリランカのサリーを活用したアップサイクル事業の仕組みは、まさにその理念を体現していた。私はこのモデルを他国でも展開できないかと考え続けてきた。そして、ベトナムの伝統衣装であるアオザイにも同じ可能性を見出したのである。

——「ベトナムの伝統衣装アオザイのアップサイクルによる伝統継承と社

会支援の可能性」。私の挑戦はこうして始まった。

意気揚々とプランを立て、現地の大学生との交流の際に情報交換をしようとして、英語で質問も準備していた。しかし、実際に訪れたベトナムで、私の甘さは打ち砕かれることになる。「What do you think about SDGs?」と切り出した私に対し、彼らは困惑した表情を浮かべ、「What is SDGs?」と問い返したのだ。その瞬間、頭が真っ白になり、何とか英語でSDGsの説明をするのが精いっぱいだった。

自分の英語力の乏しさに愕然とすると同時に、言葉だけを表面的に振りかざして議論をリードしようとした自分が嫌になった。

私たちの「当たり前」が必ずしも他文化では当たり前ではない。事実、彼らは「SDGs」という言葉を知らなかったが、ベトナムにおける社会課題への具体的な取り組みを語ってくれた。例えば、食品ごみを循環させる独自のゼロウェイストの仕組みを実現していたし、大学にはジェンダーレスなカップルが自然に存在し、受け入れられていた。ただし、リサイクルやアップサイクルについては見える形で観光客の私に触れられる機会はなく、まだ私の挑戦は粗削りではあるが諦めるには早すぎると思い直せた。

この研修を通じて、私は「異文化の現場で学ぶこと」が、自分の考えを試し、また壊し、そして新たに築き直すきっかけになることを経験した。現場を知ることなく夢だけを描いて、社会貢献の押し付けになっては元も子もないのだ。帰国後には、アオザイのアップサイクル事業を「誰もが参加しやすくなる社会貢献の仕組み」として具体化するためにいくつかの商品提案も考えた。まだ始まったばかりの小さな挑戦だが、ビジネスコンクールでの発表を目指しながら、社会に還元できる形に育てていきたい。持続可能な社会は、特別な人だけが築くものではなく、一人ひとりの小さな挑戦の積み重ねから生まれると信じて。

審査員
特別賞

Pages of Hope — 教科書がつなぐ世界と未来

〔三重県〕

三重県立津高等学校 1年 谷村 七海

「日々の小さな一歩が世界の幸せにつながる」という言葉や、「質の高い教育をみんなに」というSDGs目標は理想論にすぎないのではないのか。世界には今も貧困や教育格差が広がっている。無力な一人の学生に何かできるはずがない——そう信じて育った。

しかし中学2年の夏、ケニアからの留学生パトリックを受け入れた経験が、私の考えを変えた。ある日リビングに放置された教科書を見た彼は強い口調で言った。

「教科書を大切にしてくれ。とても高価なものだから！」

日本では教科書は無償で配布され、誰もが新しいものを当然のように受け取ることができる。しかし彼の故郷ケニアでは教科書は家族が苦勞して購入するものだ。その現実に衝撃を受け、「当たり前が当たり前でない世界」があることに気づいた。

それ以来、問いが頭を離れなかった。もし教科書がなければどう学ぶのか。知識を得られなければどう貧困から抜け出せるのか。私は毎晩のようにパトリックと教育と貧困について議論した。その中で貧困の連鎖を断ち切るには教育が不可欠だと確信し中学3年の時、親友とPages of Hopeという学生グループを立ち上げた。

私たちは使わなくなった教科書を集め1ページごとに英語とスワヒリ語の翻訳を貼り、吹き出しで「私はこう考える」とコメントやイラストを添えた。例えば茶色くなった葉を見て泣く子どもの前にドラえもんが現れ、「この雲の中には工場からの硫黄や煙が含まれていて雨が酸性になるんだよ」と説明する場面だ。さらに灰色の雲から黒い雨が降る仕掛け絵本のような工夫も加え、ページをめくるたびに学びが広がるようにした。子どもたちが驚く顔を思い浮かべると胸が高鳴り描き込みに力が入った。知識を伝えるだけでなく、日本の同年代の視点に触れることで「学ぶ喜び」を感じてほしいと願ったのだ。

活動を始めてから私自身も変わった。授業中は以前より集中し先生や友人の意見を積極的に取り入れた。誰かのために始めた活動がいつしか

自分の知識を深め多様な考えに触れる喜びへと変わっていった。

私たちは輸送費の問題のような多くの困難に直面した。地域の工場や商店に協力をお願いしたが、最初は断られ悔しさで涙がにじんだ。汗ばむ手で震える声を抑え「どうしても届けたい」と次の会社のドアを叩いた。その過程でSDGs目標「パートナーシップで目標を達成しよう」を思い出した。一人で抱え込むのではなく人とつながることが大切なのだ。地域の方々に相談し何度もプレゼンを重ねた結果、協賛を得て教科書を送ることができた。小さな学生の思いが地域の力と結びつき大きな力に変わった。

活動が1年を過ぎた頃ケニアの学生から手紙が届いた。翻訳した歴史の教科書について、「自分たちの学びとは違う」と書かれていた。日本の教科書ではアフリカの植民地化は西洋列強の「偉業」のように描かれていることもある。しかしケニアの人々にとっては先祖の土地を奪われ文化を否定され、命をかけて独立を勝ち取った最悪の時代であり、今も続く痛みの記憶だと教わった。私は「歴史は一つではなく立場によって語り直されるもの」と深く理解した。国際共生は現地の視点を尊重することから始まると思うのだ。この気づきを生かし、私はPages of Hopeを将来は他の地域やデジタル教材へ広げ、より多くの子どもたちに学ぶ機会を届けたいと考えている。

「日々の小さな一歩」は貧困地区の子どもたちのためだけにあってはならない。私はこの活動を通じて多くの出会いや失敗を経験し、かけがえのない財産を得た。私がかたどり着いた結論は、異国の子どものために一方的に協力することではなく、異なる背景を持つ人々が互いに尊重し学び合うことでこそ国際共生が実現するということだ。教科書の寄付という小さな一歩は、私にとって世界の幸せにつながる最初の物語となった。そして私は、この一歩を未来へつなぎ、誰一人取り残さない世界を自らの手で築いていきたいと強く願っている。

想いの連鎖は、国境をこえる。

〔東京都〕

立教女学院高等学校 2年 宮前 律桜子

「サッカーボールが欲しい!」

その一言が、私の心を深く揺さぶった。昨年の夏、カンボジアの寺子屋で出会った子どもたちが、目を輝かせて語った願い。それはとても素朴で切実な願いだった。日本で当たり前になっているそのボールが、そこでは遠く手の届かない「夢」の象徴となっていた。日本で暮らす私は、サッカーボールを「あるのが当然」と思っていた。学校にも、公園にも、部活動にも、いつだってそこにあった。でも、あの子の「欲しい」という言葉に、私はハッとした。自分にとって当たり前なのが、誰かにとっては心から願うものなのだ。そのことに気づいた瞬間、自分の「普通」は世界の「普通」ではないのだと実感した。これまで世界の「幸せ」という言葉は、どこか抽象的だった。でも今は違う。私は、「誰かの小さな願いに気づくこと」こそが、幸せの入口だと思っている。なぜなら、私自身がその願いに出会ったことで、初めて自分にできることを本気で考え、動き出す勇気をもたらしたからだ。その瞬間、世界の幸せは一気に、他人事から自分事へと変わった。

帰国後、私は一緒にカンボジアスタディーツアーに参加した仲間と共に「GOAL (Give Opportunity And Learning)」という学生団体を立ち上げた。全国の高校や地域のサッカークラブから使わなくなったサッカーボールやシューズ、ユニフォームを集め、カンボジアの子どもたちに届ける活動をしている。私たちが届けたいのは、単なるボールや用具だけではない。スポーツを通して育まれるチームワーク、自信、「やってみよう」と思える環境そのものだ。夢を持つこと、挑戦することの楽しさを、サッカーというきっかけを通して広げたい。そんな思いが私たちの活動の根底にある。この活動の中で、私は驚いたことがある。それは、多くの人が「誰かの力になりたい」と思っていたことだ。用具を提供して下さる方々、声をかけ協力して下さる先生、共感して広めてくれるたくさんの友人。そして

SNSで私たちの活動に共感し、クラウドファンディングを通して支援して下さる方々。活動のたびにみんな自分事のように動いてくれることに感動した。また、そうした繋がりの中で感じたのは、「想いは想像以上に届く」ということだ。世界は広く、限りなく複雑な課題で溢れかえっている。しかし、自分にできる小さなことから始めた活動が誰かの背中を押す力になる。その手ごたえを私は確かに感じている。そして社会をよりよくするうえで重要なことは、そういった連鎖を信じて行動し続けることではないかと考えるようになった。

カンボジアで出会った子どもたちは、学ぶことや遊ぶことに対して、いつも真剣だった。限られた環境の中でも「今できること」に全力で向き合っていた。私は、そんな彼らの姿から多くのことを学んだ。困難の中でも希望を見つけようとし、夢を全力で追い求める姿勢に、ただ感心するのではなく、自分もそうありたいと本気で思った。それと同時に、「自分には何ができるのか」という問いが私の中に芽生えていった。その問いの答えをかれこれ一年近く模索し続けていた。でも、今は迷いよりも、動きたい気持ちの方がずっと強い。完璧じゃなくていい。立派なことじゃなくてもいい。ただ、知ってしまった現実から目をそらさないこと。見て見ぬふりをしないこと。それが私の中に生まれた答えだった。たとえ世界を一気に変えることはできなくても、目の前の誰かの未来を少しだけ明るくすることはできる。ひとりの手は小さくても、差し伸べる勇気があれば、誰かの希望になれる。

今、私は、このエッセイを書きながら、あのときの一言が私を奮い立たせたように、今度は私の行動が誰かの心を揺らすきっかけになることを心から願っている。直接会えなくても、言葉や行動で人の想いは繋がっていく。もしそれが、また別の誰かの行動へと繋がっていくなら、きっとその静かな想いと勇気が世界を照らしていくはずだ。

選択できる幸せ

〔神奈川県〕

神奈川県立城郷高等学校 2年 本田 結菜

私は今年の夏、タイ最大規模の孤児院であるワットサケーオ孤児院を訪れた。そして、子供たちと日本語や日本とタイの民謡や踊りを教えあい、折り紙などを通して、交流をした。タイを訪れたきっかけは、SNSでタイの食文化についての投稿を見たからだ。トムヤムクンやグリーンカレーなどの美味しそうなタイ料理に興味を持ち、タイに行きたいと思い始めた。そして、どうせ行くのなら観光をするだけでなく、何か意味のある活動をしたと思い孤児院を訪れた。

首都バンコクから車で2時間ほどの世界遺産で有名なアユタヤの町に孤児院はある。主に孤児や経済的に自立困難な家庭の子ども(3~18歳)およそ2,000名が暮らしている。孤児院はお寺から始まり、寺としての歴史は300年ほどと言われており、子どもを預かるようになったのは1941年からだそう。別名「子捨て寺」という悲しい名前が付けられるほど、子育てに困って子どもを置いていく親が今も後を絶たない。

訪れる前の私は孤児院の子供たちは、親から捨てられてしまった寂しさやトラウマを抱えている子供が多いのかなといった偏見を持っていたが、実際の子供たちはとても元気で人懐っこく明るかった。また、年長の子供もが下の子供の面倒をみて、まるで兄弟のように子ども同士で仲よく支えあう姿に私は生きていく力強さを感じた。だが、それと同時に支え合う他ない背景があると感じた。それは圧倒的な人手不足だ。昼間に子供たちに勉強を教えたり、ご飯を与えたりするスタッフはかろうじて足りているが、住み込みで子供たちと一緒に寮生活を送り、生活や心のケアを行うスタッフは子供に対して非常に少なく、全ての子どもに目が届いているとは言えない状況だった。子ども同士で支えあうことは、協力が生まれるなどのメリットもあるが、本来大人が担うべき役割を子どもに背負わせてしまい過度な負担がかかるデメリットも大きいだろう。

突然であるが、私の好きな言葉に哲学者ジャン・ポール・サルトルが残

した『人生は、「B」と「D」の間の「C」である』というものがある。「B」は「Birth(誕生)」、「D」は「Death(死)」。そしてその間にある「C」は「Choice(選択)」を表している。この言葉を初めて聞いたとき、確かに人は「どう生まれてくるか」や「どう死ぬか」は選べないが、生まれてから死ぬまでの人生を「どう生きるか」は選ぶことができるのだと納得した。そして、私は「どう生きるか」を選べるからこそ「幸せ」なのではないかと考えた。なぜなら、自分でどう生きるかを選べることは、自由や夢を持てることにつながり、責任を持って人生を歩む誇りや喜びをもつことになるからだ。

私は、中学卒業後高校に進学することを選び、高校卒業後の進路も就職せずに大学に進学する道を選ぼうとしている。タイと比べて日本の子どもは自分が「どう生きるか」を幅広い選択肢から選べる環境にある。しかし、タイの孤児院で出会った子どもたちは、「どう生きるか」を選ぶ選択肢が狭く、無いように感じる。この現状は、私の考える「幸せ」とは遠いだろう。

そこで私は、少しでも子どもたちの将来の選択肢を広げるために行動を起こした。帰国後、周りの人にタイの孤児院が直面している課題を紹介した。また、SNSを通じて現地での体験を投稿し、寄付の必要性を呼びかけた。私自身もわずかではあるが寄付を始めた。大きなことではできなくても一人一人の積み重ねが子どもたちの自分の人生を「選ぶ」可能性を広げられると信じている。

今回の経験を通して、私は「どう生きるか」を選べる環境の幸せに気付いたと同時に、選べない子どもたちの現実を知った。だからこそ、私にできることは少ないがこれからも行動を続け、この経験と学びを大学にて研究したいと思い始めた。全ての子どもたちが「どう生きるか」を自由に選べる日が来ることを願っている。

「小さな選択が未来をつくる」

〔兵庫県〕

近畿大学附属豊岡高等学校 2年 井川 祥来

「アブラヤシ農園の拡大は環境を壊し、生き物の命や子どもたちの教育の機会を奪う。だからなくすべきだ。」それが私の正義だった。ポルネオのオランウータンが絶滅の危機にあり、農園では児童労働まで起きているとネットニュースで知った時から「世界の幸せのためには、これを解決しなければならぬ」と思った。けれど心のどこかで、自分の生活とは無縁の、遠い国の問題だと感じていた。

しかし、この単純な正義と無縁感で、今年2月から10月にかけて開かれる地球環境コースサミットでの議論やロールプレイを通して揺らぐことになった。このサミットは世界中の若者が集まり、地球規模の環境問題や社会課題について議論し、持続可能な社会の実現を目指す国際会議である。私がこのサミットへの参加応募を決めた理由の一つに、私の故郷である兵庫県豊岡市で、一度国内では絶滅したコウノトリを再び空に戻した経験を世界で生かしたいという思いがあった。私が所属している部活では、湿地保全や子ども向けの自然体験活動を行っており、「ポルネオでもオランウータンとの共生はすぐにできるものだ」と考えていた。しかし、サミットの一環でインドネシア政府、NGO、農園経営者、労働者、そして消費者としての立場を演じる中で、私は衝撃を受けた。「児童労働や環境破壊は誰か一人のせいではないが、自分たちの生活も加害の一部になっている」と気づいたのだ。

特に消費者役を経験した時のことが忘れられない。私は「パーム油を安く手に入れたい」と発言した。自然な願いだと思ったが、その声が生産地の価格を押し下げ、労働者の生活を圧迫し、子どもたちが学校に通えず働かざるを得ない状況を生んでいた。自分の消費行動も問題の一端になっていると知った瞬間、胸が締め付けられる思いだった。教育を受けられなければ将来も低賃金のまま。貧困の連鎖と環境破壊は表裏一体であ

り、私たち消費者もこの問題に深く関わっているのだ。

では、どうすれば「世界の幸せ」につながるのか。政府は農家の収入を安定させ、NGOは環境と人権を両立させる活動を進めるべきだと思う。豊岡市では、コウノトリの野生復帰を支えるため農薬を減らし、「コウノトリ育むお米」としてブランド化して農家の収入を守った。インドネシアでも、人と自然の共生を可能にする工夫が必要である。実際に現地では、分断された森をつなぐ「緑の回廊」や地域住民と協力した植林活動が進められ、オランウータンだけでなく人々の未来も守られ始めている。

そして私たち消費者にもできることがある。私は買い物をするとき、RSPO認証商品を選ぶようにしている。RSPO認証商品とは、「持続可能なパーム油の円卓会議」という国際的な組織が認証した、環境や人権に配慮して生産されたパーム油を使った商品だ。これを家族や友達に説明するだけでも、みんなの生活や森の命を守る一歩になると思う。企業や農園経営者も短期的な利益にとらわれず、地域と環境を見据えた経営を進めるべきだ。環境問題は「遠い国の話」ではなく、私たちの暮らしに直結しているのだ。

この体験を通じて、私は環境と社会の両方を守る視点を持ち、複雑な現実にも粘り強く向き合う姿勢の大切さを学んだ。現地で進む「緑の回廊」や植林のように、環境と人の暮らしとともに支える努力が始まっている。そしてそれを支えるのは、一人ひとりの小さな選択の積み重ねだ。

「世界の幸せ」とは、一部の人の幸せのために他の誰かが犠牲になることではない。自然と人々の暮らしがともに守られることこそ、本当の幸せである。未来は私たちの手の中にある。一人ひとりがどんな視点を持ち、どんな行動を選ぶか。その積み重ねが、世界の幸せを築き力になるのだ。

あなたも大切、わたしも大切 ―世界をつなぐ合言葉

〔兵庫県〕

松蔭高等学校 2年 橋井 樹理

幸せとは、誰かに心から認められ安心して自分らしくいられる瞬間にある。

私はそれをカナダで実感した。家族や友人、そして自分自身、だれもが地域社会の人々と対等に尊重しあえる関係を築けたら、文化や国境は関係なく、心からの幸せが生まれる。そして、世界中の人がそのようにくらす社会をつくることこそが世界の幸せへとつながるのではないかと考えている。

カナダでの経験は幸せの意味を深く考える機会になった。ハロウィンの日、警察の仮装をして学校へいった。すると、学校の子が「いいね！」と褒めてくれたが、お世辞という文化の中育った私は謙遜し、素直に喜べずにいた。だが、カナダの生徒たちは褒められると自然に「ありがとう」と返して相手も笑顔でうなずく。そこには、遠慮や気まずさはなく互いに認め合う温かさが感じられた。幸福とはこういう互いに認め合うささいな瞬間にあるのだと感じた。

さらに上下関係の考え方も衝撃を受けた。日本は上下関係に厳しく、言葉や態度が制限されやすい。しかし、カナダでは学年関係なく自然とみなが同じテーブルを囲み、昼食をとっていた。そのあとも、体格や男女や学年関係なくバレーボールを楽しむようにしていた。そこには、「上か下か」という感覚はなく一人の「仲間」として対等に接していた。年齢や立場に縛られず自由に意見交換をしている様子を見て強い印象を受けた。

これらの経験を通して、私は心には疑問が浮かんだ。「日本で重要視されている謙虚さや協調性は本当に相手を思いやれているのか。」もちろん、それらは素晴らしい文化だ。だが、時にそれは相手の思いを否定したり、自分の考えを押し殺すことにつながるのではないだろうか。それに比べ、カナダでの「相手も自分も対等に認め合う」という姿勢に感銘を受けた。この姿勢は、多様性が広がる今の社会に必要な不可欠だと思う。

この気づきを「松蔭ドーナツ」という企画でCEOとして活かした。家庭内のゴミは約5割が野菜で、その理由は野菜嫌いな人が多いからだ。そこで、規格外品の野菜を農家からもらい、ドーナツに入れることによって野菜への苦手意識克服のきっかけとし、フードロス削減につなげようという取り組みだ。だが、そんな考えは甘いのだと、現実と理想のギャップに直面した。農家に聞くと規格外品は想像以上に少なく、すでに多くが別の方法で活用されていた。そこで、これからの方向性で私は判断に悩んだが、カナダでの「対等に向き合う」姿勢を思い出し、CEOで独断するのではなく仲間の意見を取り入れた。販売の過程では、外部のインターナショナルの先生と打ち合わせしたり、地域のドーナツ屋や購入してくれた地域の人にアンケートを実施して次の販売に活かすなど多くの人を巻き込んだ。そこはまさに、カナダで学んだ「対等な関係」の実施の場であった。この経験を通して、互いの意見を分かち合い、一つのものを多くの人で作り上げることへの喜びを知った。購入者が「かわいい」「おいしい」と手に取ったとき、「小さな行動でも人の心を動かせる」と実感した。

私は思う。世界の幸せは大きな力で当然実現するものではない。むしろ、文化、年齢、立場を超えて「あなたも大切、わたしも大切」といえる小さな行動の積み重ねである。まさに、ハロウィンで交わされた短い言葉、地域で作り上げた一つのドーナツ。そんな小さな出来事が、人と人を結び、未来へとつながっていく。

私は将来、社会に貢献し、世界の人々を笑顔にできる食品を企画する仕事に就きたい。国境や文化の領域を超えて喜びを届けるように世界に羽ばたきたい。カナダ学んだ「対等に向き合う」姿勢と松蔭ドーナツで感じた「協力する喜び」を胸に、身近な行動で幸せを世界に広げていきたい。小さな一歩がやがて世界の幸せへとつながる。私はその歩みを止めない。



等身大の自分から始まる国際協力～義手開発と未来への小さな一歩～

〔兵庫県〕

独立行政法人国立高等専門学校機構明石工業高等専門学校 1年 石井 大地

世界には、貧困、紛争、差別、教育格差など、さまざまな問題がある。それは、教科書に書かれた抽象的な言葉ではなく、ニュースや映像で何度も目にしてきた現実だった。でも、自分はそれを知っている、見ていただけだった。困っている人が世界中にいるのに、傍観しているだけの自分。そんな自分が、どうしても許せなかった。

「何でもいい。とにかく行動を起こしたい。」

そんな想いを抱えていた私が出会ったのが、安価な筋電義手の開発プロジェクトだった。このプロジェクトは、私が参加する前からすでに始まっており、高専の先輩たちが地道に取り組んでいたものだ。

プロジェクトの目的は、「義手を必要とする人々に、安価で実用的な義手を届けること」だけではない。最終的には、現地の人々とオンラインで交流しながら、義手の調整や生産を彼ら自身が行えるようにすることを目指している。それはまさに、持続可能で自立可能な支援の形だった。

「これだ」と思った。

技術が、遠く離れた誰かのために生きる。自分が学んでいる電気情報工学の力が、目の前の課題と世界の問題の両方に通じていると感じた。

義手の開発には、モーター制御、筋電センサー、回路設計、プログラミング、3Dプリンタによる部品の製作など、多岐にわたる技術が必要だ。私はまだ学び始めたばかりで、分からないことばかりだった。センサーは安定せず、モーターは思うように動かない。何度も失敗し、試行錯誤の日が続いた。

このプロジェクトを通して、私は世界の義手事情についても深く学ぶことができた。戦争や事故、病気などで手を失った人は多く、特に開発途上国では義手の入手が困難だ。それらの理由により生産性が低下する悪循環

が生じてしまう。

そこで私たちは、「高度な機能」よりも「自分たちで扱える、ちょうどいい技術」を目指している。3Dプリンタで製作可能なパーツ、シンプルなプログラム構成、壊れても自分たちで修理できるような設計。それを、現地の人と一緒にオンラインで調整していく。このようにして義手を「届ける」のではなく、「一緒につくる」支援が私たちの目標だ。

この姿勢は、JICAが大切にしている「共に考え、共に育つ国際協力」の理念に通じる。外から与えるのではなく、相手の文化や状況に寄り添いながら、一緒に解決していく。自分の技術や知識や英語力が、そのプロセスに活かされるとしたら、これ以上のやりがいはない。

私たちの義手は、まだ開発途中だ。完成どころか、ようやく基本的な動作が安定してきた段階である。それでも私は、仲間たちとともに、実用化と現地展開という未来を信じて日々取り組んでいる。そして何より、「世界の誰かのために動く」という気持ちだけは、誰にも負けないと胸を張れる。

「世界の幸せ」という言葉は、あまりに大きく、遠いもののように思えるかもしれない。でも、自分たちの技術が、誰か一人の生活を変え、笑顔を生む手助けをできるとしたら、それはまぎれもなく“世界の幸せ”の一部だ。私は将来、人と向き合えるエンジニアになりたい。技術と優しさをあわせ持ち、現場で、本当に必要とされるものを作り、他人の幸せを生み出す支えとなる人間になりたい。

たとえ今は未熟でも、「今、ここにある課題に、等身大の自分で向き合うこと」こそが、未来へつなぐ第一歩になると信じている。



「生きる」をする

〔岡山県〕

岡山県立笠岡高等学校 2年 小玉 廉

私は昨年、グローバルユース国連大使として活動させていただいた。グローバルユース国連大使は、日本の生徒と海外の生徒が共に国際社会の抱える課題や、日本と世界の違いを学び、国内の視点、海外の視点からグローバルな視点をもって世界で活躍できる人材育成を目的として、公益社団法人日本青年会議所が実施する「グローバルユース国連大使育成事業」である。海外研修ではカンボジアを訪問した。その経験は一生忘れられないものになった。その日、現地のスーパーマーケットに入ろうとすると、日本では小学1、2年生ほどの男の子が私の足に抱きついてきた。すぐ近くの木の後ろから、母親であろう女性がこちらをそっとみている。私は戸惑った。日本ではこんなことを経験したことなかったからだ。しかし、その子の小さな手の力強さと、必死にしがみつこうと、胸が熱くなった。言葉は通じなくても、「生きたい」という気持ちがまっすぐに伝わってきて、「生きる」をする姿勢をゼロ距離で感じた。その瞬間、私は「この子はどんな思いで生きているのだろう」「私にできることは何だろう」と深く考えさせられると同時に、何もしてあげられない自分の無力感に打ちのめされた。

別の日、私は現地の小中学を訪れた。その施設は日本よりもとても粗悪なものだった。仲良くなった1人の子と話していると、「もっと学校で勉強したいんだけど、家の手伝いがあるから来れない日も多いんだ」と悲しそうに笑顔で言ってくれた。カンボジアでは、その子のように、多くの子どもが十分な教育を受けられず、未来に希望を持ってない状況にある。日本では学校で学ぶことは当たり前で、時には退屈にすら感じるものだが、カンボジアでは「学びたい」という願いすら叶わない子どもがいる。私はその現実に強い衝撃を受けた。

私は、教育は、単に読み書きを教えるだけではなく、夢を描き、それに挑戦するための力を与えてくれるものだと思った。だからこそ私は、「す

べての子どもに学ぶ権利を届けること」が世界の幸せを実現する大切な一歩だと思う。

その方法の一つとして、オンライン授業が挙げられる。録画された授業なら、家の手伝いを終えた後でも学ぶことができ、インターネットを通じて遠く離れた先生や友人とつながることもできる。もちろん、カンボジアの農村には電気やインターネットがまだ届いていない地域もある。しかし、太陽光パネルや安価な端末が広がれば、きっと多くの子どもに教育の機会が生まれるはずだ。私は将来、こうした仕組みをつくり、どんな環境に生まれた子どもでも夢を描けるようにしたいと考えている。

その一歩として、私は現在、オンライン授業が教育格差をなくすための方法であることを確かめるために、岡山ユニセフ協会の御協力を得て、私の作った動画がどのくらいの人に見てもらえるか検証しながら探究活動を行っている。これにより、効果的な動画の長さ、見てくれる年齢層も調査することができる。スマートフォンやタブレットを使って文字や計算を学べる教材があれば、学校に通えない子どもでも自宅で学習をすることができ、人生を切り拓いていける手段になると思うのだ。

「世界の幸せ」とは、遠い国の出来事に心を痛めるだけではなく、小さなことでも自分にできることを行動に移すことから始まるのだと思う。私はあの子が抱きついてきた時に感じた熱い想いを忘れず、未来へ教育の希望をつなげていきたい。安直な言葉になるが、世界はとても広い。世界は思っているより広く、思っているよりも身近だ。だからこそ、世界の現状をより良くするために、私は小さな自分にできることを積み重ねていかなければならない。私は、あの日に抱きついてきた子どもの小さな厚い手から感じた、「生きる」をしようとする姿勢を見習い、自分を成長させて生きたい。

私は港の街で生まれた。私の住む街は造船業が盛んで外国人労働者が多く暮らしている。住宅街でも商業施設でも地域に出ると、そこにはいつも様々な国籍の老若男女がいて、それが私たちの「いつも」であり日常だ。

私の通った小学校は、外国籍の児童が市内で最も多く在籍し、その数は全校児童数の二割を超えた。学校ではどの国籍の児童にも良き学び舎となるよう様々な工夫が凝らされていた。掲示物は日本語を含めた複数の言語で表記され、文化祭にあたるワールドフェスタでは世界の歴史・文化、衣食住や遊びなどの習慣について発表し合い、共に学んだ。私たちに心の壁はなかった。私は幼少期からそれを当然とし、友人たちと切磋琢磨しながら成長してこられたことにとても感謝している。なぜなら、今でもずっと私にはフィリピン、中国、韓国など世界各国にルーツを持つ友人たちがいるからだ。親友の一人はフィリピン国籍で、高校生になった今でも交流があり、別々の高校に進学しても遊んだり互いに悩みを相談し合えたりできるとても良い関係が続いている。

外国にルーツを持つ友人たちの両親は、日本語が分かりにくいことがあるため、学校からの通知や地域の情報などは子どもが通訳をしている。また、日常会話はできても学校の授業が理解しにくいという子どもが多くいるため、私の街では2015年からコミュニティセンターで「にほんごひろば」が開かれ毎週多くの子もたちが真剣に学習している。これまでに延べ百人近くの子もたちが参加したとのことで、勉強したり遊んだりする中で外国にルーツを持つ彼らにとってかけがえのない居場所となっている。ここでは仕事を退職した人や大学生などがボランティアとして一人ひとりに合わせた学習支援に取り組んでいる。世代を超えて様々な人々がここで交流し共に学び共に楽しんでいる。私の友人たちもここに通り、日本語を学習し、コミュニケーションを取りながら様々な楽しい活動

ができて本当に良かった、と話していた。

調べてみると、この他にも私が住む街には大人が通える日本語教室や外国語教室、外国人の子ども向けの放課後学習教室や有資格者が行う生活相談などがあり、地域の中でこんなにも多くの集いの場があることを知り嬉しくなった。「知らない」ということは悲しいことであり、それが無関心や誤解を生む原因となる。誰でも孤独は辛いし嫌だ。私は、人間関係において互いに理解し、尊敬し、認め合うということを生活の中で学び身に付けて来た。そしてこれらは、いつでも、誰でも、どこでも始めることができる。特別な準備も資格も要らない。必要なのはただ一つ、相手思いやる優しい心、それだけだ。

時に言葉は、心の隔たりになることがある。例えば、私はこれまでに駅や訪問先などで外国人に話しかけられたり説明を求められたりする機会が幾度かあった。初めは恥ずかしくなったり自分の話す外国語が間違っていないか気になったりして不安だったが、回を重ねる毎に少しずつ心がほぐれていった。自分にとっての非日常を日常化するよう心がけると気持ちが変わり、気持ちが変わると行動が変わり、行動が変わると世界が変わると思った。

今、私たちが暮らす社会には異なる宗教や習慣、様々な文化や言語的背景をもつ人々が共に生活している。その多様性は、新しい価値観を学ぶ大きな機会でもある。単なる知識ではなく、共に体験し共感することで理解に繋がる。様々な災害時にも言葉や文化の違いで情報が行き届かなければ、助け合うことができず大きな危機に直面する。だからこそ、日常の中で互いを知り声を掛け合える関係を築くことが大切であり、挨拶や日常会話の積み重ねがその大きな力となる。多文化共生の未来にこそ、平和で活力のある地域社会が広がる。私は、社会の一員としてこれからも考え、行動し、共に生きていく人でありたい。

出発前夜、ニュースの中の「中国」はぼんやりと巨大で、少し怖い存在だった。けれど中国の空気を吸って最初に感じたのは、独特で唐辛子のような匂いと、バスで盛り上がる会ったばかりの中国と日本の学生の笑い声だった。美術館で出会った大学生が、スマートフォンに拙い日本語で「はじめての日本人の友だち」と打って見せてくれた。僕の中の「国」は、その瞬間から血の通った「顔」を持ち始めた。

滞在中、僕は何度も自分の中の偏見がほどこけていくのを感じた。高校生との交流でいろんな話で盛り上がった時。別れの空港で「絶対に泣くなよ」と笑い合った友だちの瞳から涙がこぼれ、自分も思わず泣いてしまった時。その涙が、僕の中にあっただけの最後の見えない壁を完全に溶かしていった。今思えば、偏見とは情報の不足ではなく、圧倒的な体温の不足だ。同じ皿を囲み、別れを惜しんで涙を流す。その温かさを分け合うことでしか、本当の理解は始まらない。

この気づきは帰国後、長崎での平和活動で、より深い確信に変わった。原爆の被害は日本だけではなく、日本へ労働者として来ていた長崎で被爆した韓国の方々や、遠く太平洋のマーシャル諸島でアメリカの核実験によって故郷を追われ、今もその影響に苦しむ人々がいる。こうした事実を知ること、僕の中の「平和」という概念は、特定の国の歴史や問題に留まらず、地球上のすべての人々に関わる普遍的なものへと広がっていった。中国で出会った友だちの顔が浮かび、彼ら一人ひとりの尊厳が、僕自身の問題として感じられたのだ。平和とは国別のテーマではなく、一人ひとりの尊厳に関わるただ一つの問題なのだとして理解した。地図には国境があるが、人の痛みも喜びも、国境をこえて私たちはおなじものを共有している。

そして、この二つの経験が一本に結びついたのは、「助ける、助けられ

る」という上下の関係ではなく、「一緒に考えて、一緒に動く」という横の関係こそが僕の信じた道だと気づいたからだ。国際協力は遠い国の大きなプロジェクトの名前ではない。目の前の友だちの表情に気づき、その名を呼び、声をかけることから始まる。

だから僕は、小さな実践を続けている。中国で出会った友だちとは今もメッセージを交わしている。先日、日本との交流で日本へ来た別の中国の友達に、熱心に語ってくれた。「日本の素晴らしさを、もっとみんなに知ってほしいんだ」彼は彼の場所で、僕は僕の場所で、互いの国の良さを伝えようとしている。僕たちは、一本の橋を両側から架けているのだ。そのことに気づいた時、視界がまた一つ開けた。

将来、僕は空の上で人と人をつなげる仕事、客室乗務員になりたい。飛行機はただの移動手段ではない。かつての僕のように、見えない壁の向こう側にいる誰かに「会ってみたい」と願う人の、最初の勇気に寄り添うための橋だ。そしてその橋は、僕一人で架けるものではないことを、今は知っている。

「国際協力」を僕の言葉で言い換えれば、世界のどこかの「届かない」を「届く」に変えることだ。言葉が届かないなら、身振り手振りで伝える。気持ちが届かないなら、同じ場所で一緒に学び、体験を共有する。情報が届かないなら、教室に自分の経験を持ち込む。高校生の僕にできるのは、そのための最初の一步を、ためらわずに踏み出すことだ。

中国での出会いと長崎での学びは、僕に「世界の幸せ」を自分ごととして考える力をくれた。だからこれからも僕は、小さな交流を大切にしていこう。友だちと一緒に、両側から未来へつなげる橋を架け続けるために。そしてこの橋こそが、世界の幸せへとつながる道だと信じている。



つながる

〔沖縄県〕

昭和薬科大学附属高等学校 1年 宮里 昌明

「今から避難するよ。不発弾があったんだって」
 私の家から二件隣の場所で、開発工事が行われていた。こんなに身近な場所で不発弾が眠っていたなんて。あとでわかったことだが、埋まっていたのは、250kgの大きな爆弾だった。私の心に爆風がおこった。もし、爆発していたら、どうなっていただろう。そう思うと、緊張と恐怖で胸が締め付けられた。幸せは、こんなにも簡単に揺らぐものだったのか。戦争は終わったはずなのに、なぜ、今も命が脅かされるのか。

私の住んでいる沖縄は、1945年に日本軍とアメリカ軍の激しい戦争があった。当時は、雨のように爆弾や砲撃が降り注いでいたことは曾祖父から聞いたことがある。2025年の沖縄県消防防災年報では、沖縄戦で使用された弾薬量は20万トンとみられ、今でも約1856トンが埋まっている。2011年、高校の校舎の建て替えて16発分の不発弾が発見されたこともあった。戦後80年たったいまでも戦争の記憶は、静かに息づいている。

「ラオスという国は世界で最も爆弾が落とされた国なんだよ、知っているかい」そう教えてくれたのは、避難先の祖母の家で久しぶりに会った私の叔父だった。近国のカンボジアに地雷がたくさん埋まっていることは学校の授業でできたことがある。しかし、ラオスという国が不発弾で苦しんでいることは知らなかった。よく調べると、ベトナム戦争の時、隣国の戦争に巻き込まれ、猛撃をうけたようだ。ラオスの地中には、今でも、不発弾が8000万個も残っている。ラオス政府は、国連開発計画(UNDP)の支援を受けて、不発弾処理機関「UXO Lao」を設立したが、資金と技術の両面で課題を抱えており、撤去作業は思うように進んでいないのが現実だった。

土地が不発弾で汚染されているということは、経済発展の根を絶たれているということだ。農業ができない。インフラが整備できない。企業も投資家も、安全が確保されない地域には近づかない。人々は恐怖の中で暮らし、教育も医療も、地域の活力も奪われていく。

私にもできることがあるはずだ。ネットで不発弾や地雷撤去のために資金や技術を援助しているNGO団体を見つけた。そこで、ラオスのために募金活動を行おうと考えた。まずは、商いをしている父を説得し、おかせてもらったが、それだけでは、うまく集まらなかった。今度は、手作りの箱を用意して、ラオスの子供たちの笑顔の写真を貼り、不発弾が撤去できずに苦しんでいる現状の説明をポスターで書いた。店の雰囲気と合わせる事が一番大変だった。今度は反響があり、1200円が集まった。私は嬉しかった。「苦しんでいる人を救いたい」という私の行動が、見る人の心に伝わったこと。私の想いは人の心を響かせることができたのだ。寄付をしていただいた人に感謝をし、世界の人に貢献できたことがうれしくなった。

私は不発弾撲滅事業のイベントに参加した。金属探知機で宝探しゲームをした。反応できる範囲が、小さくて、広い土地で何時間も探知機を使って不発弾を探す作業は想像以上に過酷だと思った。私は今、プログラミング教室でAIについて学んでいる。この技術を、不発弾の探知や撤去に活かせないかと考えている。たとえば、犬型ロボットにロードマップを覚えさせ、子供が目的地に到着するまで安全な道を誘導させるなどの開発ができれば違う未来があるかもしれない。私は、世界の痛みに寄り添う開発者になりたい。

幸せは、恐怖のなかにはない。子どもたちが自由に走り回れる土地、そんな当たり前が幸せの土台となる。世界には、地雷や不発弾の被害に苦しむ国が60以上ある。遠く離れた国だが、痛みは繋がっていることを知った。それならば、幸せも繋がるはずだ。広げることができる。あなたも足元から顔を上げて世界で起きていることに興味を持ってほしい。世界は繋がっている。小さな出来事が、私を変えたように、私の言葉があなたの未来を変える力になると信じている。



透明人間に言葉を着せて

〔沖縄県〕

N高等学校 2年 賀須井 美咲

「透明になった気がする。」
 NPO法人で日本語教室の講師をしていたとき、担当していた留学生の生徒がそうつぶやいた。拙い日本語が周囲に伝わらないため、友達ができず、バイト先でも存在しないものとして扱われる日々。彼女の言葉を聞いた瞬間、胸の奥が締めつけられた。教室で一緒に学んできた時間が、彼女の孤独を和らげる力になれていなかった。その現実が情けなく、無力感に押しつぶされそうになった。

頭の中には「もっと上手に教えられていれば」「もっと役に立てていれば」という後悔ばかりが渦巻いた。あれほど一生懸命に勉強していた彼女が、それでも孤独に苛まれている。その姿を前に、私は「自分の努力が届いていない」という悔しさに震えた。

けれど、このままでは何も変わらない。職場の環境を直接変えることはできなくても、せめて友人関係の孤立を減らすことならできるかもしれない。そう考え、私は他の留学生や日本人学生を対象に、小さな交流会を企画した。最初は数人だけ。輪に入れずに隅に座る生徒の姿に不安も覚えた。しかし回を重ねるうちに、少しずつ笑顔が広がっていった。日本語が流暢でなくても、ジェスチャーや表情で気持ちは伝わる。持ち寄ったお菓子を分け合い、母国の遊びを紹介し合い、互いの文化の違いを面白がりながら受け入れていく。小さな部屋に笑い声が満ちていく光景を見たとき、私は「孤独を減らすことはできる」と確信した。悔しさをばねに踏み出した一歩が、確かに誰かの力になったのだ。

この経験から私は、「感情を行動に変える力」を学んだ。無力感や悔しさを抱えたままでは何も変わらない。しかし、それを行動に変えたとき、人や社会は少しずつ前へ進む。交流会という小さな取り組みでも、人と人

を結び、孤独の痛みに寄り添うことはできた。それは私にとって成長の証であり、社会に関わる責任を自覚するきっかけとなった。

孤独の問題は、一人の留学生に限られない。言語や文化、経済格差、障害や病気。理由は違っても「透明にされる経験」は誰にでも起こり得る。孤独は目に見えないが、心を深く傷つけ、学ぶ機会や働く力さえ奪ってしまう。だからこそ、この問題は個人だけでなく社会全体で向き合うべきだと私は考える。

大きな改革は一度に実現しない。それでも、目の前の一人に寄り添う小さな行動が、確かに社会を変える力になる。私は交流会の経験からそれを実感した。人は誰かに受け入れられることで安心し、誰かを受け入れることで世界を広げていく。その積み重ねが孤独を和らげ、共に生きる未来を形づくっていく。

「世界の幸せのために私たちができること」とは、遠くで壮大な事業を成し遂げることだけではない。目の前の孤独を見過さず、声をかけ、共に時間を過ごす。そのささやかな積み重ねが、人を支え、社会を動かす力になる。私はこれからも「孤独に気づく目」を持ち続けたい。そして、悔しさや無力感を行動に変える勇気を持ち、学びと実践を重ねていきたい。

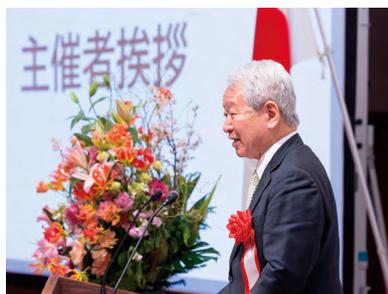
誰一人として孤独にしない社会をつくること。それが私の「未来へつなげるための挑戦」であり、世界の幸せにつながる道だと信じている。小さな行動からでも前へ進み、未来を形づくる一人でありたい。

JICA国際協力中学生・高校生エッセイコンテスト2025表彰式

テーマ：世界の幸せのために私たちができること～未来へつなげるために～

2026年2月14日(土)、JICA地球ひろばにて、JICA国際協力中学生・高校生エッセイコンテスト2025の表彰式が開催されました。2025年度は「世界の幸せのために私たちができること～未来へつなげるために～」をテーマに募集し、全国から寄せられた29,854作品の中から、40名の上位入賞者が選ばれました。清々しい笑顔の受賞者をはじめ、ご家族、学校関係者、後援・協賛団体・企業、審査員など多くの皆様にご参加いただきました。

64年続いた本コンテストは、今年度をもって幕を閉じます。最終回となった表彰式では、過去の受賞をきっかけに国際協力の道に進みJICA職員となった福地健太郎職員からのメッセージも届けられました。(※次ページ)



JICA理事長の言葉



祝辞を述べる尾木審査員長(中学生の部)



祝辞を述べる星野審査員長(高校生の部)

JICA地球ひろば見学：「体験を通して学ぶ楽しさ」

JICA地球ひろば見学では、世界が直面する課題を学べる体験型展示を通じて、国際協力やSDGsへの理解を深めました。受賞者たちは展示物に触れたり、目を輝かせながら「地球案内人」の説明に熱心に耳を傾けていました。見学後には、「国ごとのSDGs達成度が見られて、日本にも課題が多いことを知り驚いた」「SDGsについて考えるきっかけになったし、展示で楽しく学ぶこともできた」との声が寄せられました。



地球ひろば見学

座談会、ランチ交流会：「審査員・同世代との交流が刺激に」

座談会やランチ交流会では、各分野で活躍される審査員・来賓の方々や、全国から集まった同世代と交流しました。参加した受賞者からは「他の受賞者の活動が良い刺激になった。自分も新たに活動してみたい」「問題の根源は何かと審査員の方からお話を聞くことができ、目の前の問題だけではなく自分の考え方が深まった」と、前向きな感想がありました。



座談会



座談会



ランチ懇親会

国際協力ワークショップ

プログラムの最後のワークショップでは、セネガルで活動したJICA海外協力隊の経験をもとに、脚に障害がある人とのエピソードの紹介があり、公平と平等をキーワードに、各場面でどう感じたか、どうすべきかを個人で考えたのち、グループに分かれて意見を共有しました。終了後には、「善意としての支援がよいのか、制度として確立した公平がよいのか、国や文化によって状況は異なるため、何がよいのか考えるきっかけになった」という声が聞かれました。



国際協力ワークショップ

過去の受賞者から贈る言葉 ～エッセイコンテストの64年が残したもの～

福地 健太郎さん 2001年度 特選 文部科学大臣奨励賞受賞

高校2年生の春、緊張で頭が真っ白になりながら、このコンテストの表彰式に出席したことを思い出します。エッセイ執筆を通じて、障害や生まれた場所に関わらず、誰もが学び、働き、参加できる世界を目指すという目標に出会い、国際協力という仕事を知るきっかけとなりました。

エッセイ執筆に当たりタイ出身のオラタイさんとの出会いがありました。彼女はスラム街で生まれ、日本のNGOの支援で教育を受け、誰もが教育を受けられる世界を目指して外交官を志していました。その話から、教育が人生の選択肢を広げる力と、国際協力の重要性を強く感じました。同時に、スラムにいる、私のように障害のある子はどうしているのだろうと考え、先生に相談したことがJICAとの出会いでした。

その後、筑波大学で教育や障害、国際協力を学び、NGOとしてスーダンで視覚障害者の教育を支援する活動を行いました。スーダンの道は穴だらけで信号もなく、点字を学んでも通学が難しい状況を知り、教育だけではなくインフラや保健など幅広い視点から取り組む必要性を痛感し、JICAで働くことを目指しました。

現在は世界各国のJICAの仲間と教育、保健、インフラ、防災など多様な観点から、障害の有無に関わらず誰も取り残されない世界を目指しています。同じ志を持つ方々と繋がり、学び合えることがこの仕事の魅力であり、今後も多くの仲間と学び合い、誰も取り残さない世界を目指したいと思います。

このコンテストが今回で一区切りと伺い、寂しい気持ちです。しかし、64年の歴史が紡いできた『誰も取り残さない世界』への思いは、これからも広がり続けると信じています。昨年、オラタイさんと再会し、変わらぬ志に触れ、このコンテストが生み出す人の縁の素晴らしさを改めて実感しました。

受賞者の皆様、エッセイご執筆の経験がそれぞれの未来につながるきっかけとなることを心より願っています。



2001年度受賞作品リンク→ [「オラタイさんと僕の夢」](#)



学校での取り組みの紹介

新しい地球の未来のために私たちができること

学校応募校(中学校384校・高校221校)を代表して、
学校賞を受賞した学校よりエッセイコンテストの応募につながった取り組みを紹介します。



高校生の部

教室から世界へ。国際教育が育む『自分事』としての地球の未来

北海道千歳高等学校 英語科担当教諭 **水野 豪人**

北海道千歳高等学校国際教養科は、国際理解教育と英語教育の充実を柱に、多様な活動を展開しています。私たちの目標は、生徒が世界の諸課題を自分自身の問題として捉え、将来その解決に直接貢献できる人材を育成することにあります。

その象徴的な取り組みが、年3回実施される「国際理解のつどい」です。生徒は地球温暖化、貧困、人種差別といった地球規模の課題から一つを選択し、自ら探究した成果を英語でプレゼンテーションします。1年生から3年生までが互いに評価し合うプロセスを通じて、専門的な知見を広げるとともに、発信力を磨いています。また、JICA研修員を招いた文化交流も重要な柱です。生徒が主体となってけん玉や福笑いなどの日本文化体験ブースを運営し、アフリカから来日した研修員の方々と交流する機会は、生徒にとって未知の文化に触れる貴重な時間となっています。

本年5月には、台湾から約20名の高校生を迎え入れました。本校生徒の家庭でホームステイを受け入れたほか、



カナダなど英語圏への2週間の語学研修で、語学力と人間性の向上を図ります。



台湾の高校生との交流の様子。3年間を通じた国際交流で、世界に通じる異文化理解力を身につけます。

互いの学校生活を紹介するプレゼンテーションやダンス、着物によるファッションショーなどを通じて深い交流を育みました。異文化に直に触れる経験は、生徒の視野を広げるだけでなく、自国の文化を客観的に見つめ直し、その価値を再認識する機会にもなっています。

さらに、11月下旬からはカナダ・バンクーバー等での語学研修を実施しました。2週間のホームステイや現地での学びは、単なる語学力の向上にとどまりません。多様なバックグラウンドを持つ人々が共生するカナダの文化を肌で感じることで、他者への寛容な姿勢を養い、人間としての大きな成長を促しています。

こうした一連の活動の相乗効果を狙い、毎年取り組んでいるのが「JICA国際協力中学生・高校生エッセイコンテスト」です。これまでの経験を振り返り、社会課題を自分の言葉で洞察するこの機会は、国際教養を深める上で非常に有用だと感じています。これからも、世界へ羽ばたき、社会に貢献しようとする強い気概を持つ若者を育てていきたいと考えています。



地球温暖化などの社会課題を自ら調べ、英語で発信する力を身につけます。



アフリカ出身のJICA研修員との交流を通じ、異文化理解を育みます。



中学生の部

「みらいデザイナー」をめざして～地域の取り組みを世界につなげる

府中町立府中中学校 沓木 里栄

本校では、「対話を重ね学び合い、『みらいデザイナー』として自らの志を育てる学校」を目標に総合的な学習の時間を中心として探究的に学びを進めています。

生徒たちはJICA東京作成のカードゲーム「モノはどこからきているの?」を通して、自分たちの生活が世界の多くの国や人とつながっていることを発見しました。そこから見えてきた課題の中から「最初に取り組むべきこと」として、命にかかわるテーマである「平和」を生徒自身が選び、行動することにしました。

戦後80年となり、被爆体験者がいなくなることに危機感を持った生徒たちは、「知るだけでなく、伝える側になりたい」と考えるようになりました。被爆者や被爆体験伝承者の方から話を聞き、被爆の実相と「伝えることの意味」を学んだ後、紙芝居や冊子を作成し、広島平和記念公園に行くことにしました。

平和公園では、国内外からの来園者に向けて自分たちが準備した方法と言葉で学んだことを伝え、“What does peace mean for you?”(あなたにとって平和とは)と問いかけました。後日、海外から届いたメールには「平和とは、

家族や友情、愛や幸せが守られる世界であり、それは戦争や対立がなく自然と調和して生きる世界でのみ実現する」という言葉があり、生徒たちは自分たちの行動が人の心を動かす力があることを実感しました。

また、沖縄戦の学習やアメリカにおける原爆のとらえ方を広島平和文化センター初の外国人理事長だったスティーブ・リーパーさんとやり取りしながら学ぶと同時に、「平和とは何か」という答えが一つではない問いについて、学年を超えて意見交換を行いました。

学びの集大成として、学びの中で最も心に残ったものやことを生徒一人一人が選び、そのもの・ことになりきって思いを絵と詩にする「ジブンゴト化ポスター」を制作しました。今後は、ポスターの朗読会や展示会をして、思いを広げていこうとしています。

このような学びを通して体験したことをJICAエッセイコンテストでまとめてきました。今後も、生徒たちが身近な課題を地域や世界とつなげてジブンゴトとして考え、未来を創っていけるようになってほしいと考えています。



ゲームを通して、他国への依存度を知る



スティーブ・リーパー氏とのやり取り



学んだことを思い思いの方法で伝える

僕は空だ。僕が生まれて長年月がたつある日。しかし、1945年の8月6日の朝だ。と思う。急に太陽がまぶしそうな光が当たった。震った。日当たりに突如としてとても大きな音があつた。この聲は僕の記憶に残っている。でも、こんなきれいな空を見るとあの日のことを忘れてしまつた。でも... 忘れたいけど...

8月6日の空

ぼくは火だ。
戦争でも使われるし、
みんなの生活でも使われる。
だけど、ぼくは戦争で
使われるよりも、みんなの
生活で、平和な世界で
使われたい。
もっとぼくを平和な
世界で使ってよ。

平和の灯

被爆に関わるモノや事柄になりきり、それらの気持ちを詩と絵で表現



2023~2024年度受賞者 海外研修報告

2023~2024年度のJICAエッセイコンテスト受賞者(最優秀賞、優秀賞)14名は、夏休みを利用して海外研修に参加しました。本研修は開発途上国の人々の暮らしと文化、現場が抱える課題とそれらに対するJICAの取り組み等の視察・体験を通して、国際理解を深めることを目的としており、参加者は約一週間インドネシアを訪問しました。

当コンテスト最終年となる今年度は中学生の部の最終審査員長を務める尾木直樹氏も同行しました。全国各地から集まった参加者はJICA事業の見学やJICA海外協力隊の活動視察、戦跡訪問、また現地の学校での同世代との交流やホームビジットなどをしました。それらを通し、日本とインドネシアのつながりを肌で感じたとともに、同国の人々の想いや暮らしに触れ、特別な経験と学びを得ることができました。研修を通して、参加者一人ひとりがあらゆる側面から「国際協力」や「世界と自分とのつながり」を深く考える機会となりました。

そんな研修を通して感じたこと・考えたことを多くの方に知ってもらおうと、参加者たちに報告書とフォトエッセイを書いてもらいましたので、以下、一部ご紹介します。



① JICAインドネシア事務所訪問・食卓

インドネシアのジャカルタに到着し、私は立派な高いビルが立ち並ぶ都市の姿を見て、自分の想像していた発展途上国よりも遥かに都会だと驚いた。次の日、まずはJICAインドネシア事務所を訪問して、インドネシアという国とJICAがそこでやっていることについて詳しくお話を伺いました。そこで、インドネシアでは、都市ジャカルタと他の地域で町の様子が大きく異なることやごみ問題、都市での交通渋滞や大気汚染などの課題があることを聞きました。また、「信頼で世界をつなぐ」というテーマのもと、JICAはインドネシアの人々と共に考え、協力しながらインドネシアと日本の2国間の架け橋となるよう取り組んでいることを知りました。さらに私達は、どうして国際協力をするのかについて考え、日本も昔は他国の援助を受けて発展したことや、世界は互いに支えあって成り立っていること、そして世界中の皆で解決すべき課題があることから、互いの長所を生かして高め合う国際協力の意義を学びました。それは、相手とコミュニケーションを取って、相手を知り、尊重することに繋がるため、世界平和を実現するための第一歩ではないかと私は考えました。その後、事務所を見学させていただき、事務所の所員の方々との座談会で、JICAの取り組みについて沢山の質問に答えていただくことができました。その日はJICA事務所の所員の方々と一緒に夕食を頂き、そこでインドネシアや国際協力についての見識を深め、皆とその振り返りを行い、感想を共有することができました。

② MRT視察

インドネシアのMRT(Mass Rapid Transit 都市高速鉄道)は、主にジャカルタで運行されている鉄道システムで、日本が協力し、日本の技術が全面的に導入されています。インドネシアで初の地下鉄として2019年に開業しました。今回は、その鉄道について学び、工事現場を見学して、実際にインドネシアの電車にも乗ってみるという貴重な体験をすることができました。まず、私たちは、ヘルメットを被り、防護靴を履き、イヤホンガイドをつけて出発しました。さんと太陽が照り付ける道を、歩いた先にある階段を下に下がり、1つ目の駅になる部分を見学しました。ここは、建築が進み、もうだいぶ出来上がっていたので、足場も良く、楽に見学出来ました。そして、駅の中を歩き、その全貌を見渡すことができ、面白かったです。しかし、とても暑かったので、汗がだくなくなり、作業している人は、さぞ大変だろうと思いました。その次に、バスを走らせて、2つ目の駅に着きましたが、ここは、進捗状況が、1つ目より2年ぐらい遅れていて、まだ地面を掘っている状態でした。私たちはもちろん、普通は、地下鉄の地面を掘っている状況など見学することはできないと思うので、とても新鮮でした。なんでも、大きな機械を回しながら掘り進めても、1日で10センチ先を掘るのがやっただそうです。気が遠くなるような、とても大変な作業だと思いました。この現場には、とても多くの人々が携わっていました。現場責任者の方の説明を聞きながら、この地面を掘るという工程を考えてみました。まず設計が大切です。ここが何になるという明確な図面、そしてどこから先に掘っていくかという手順も、とても難しいと思いました。多面的に考えなくてはならないでしょう。そのほかにも、耐震性や防水性や安全性、点検口など、ありとあらゆる設計や計画が必要です。それらを日本の清水建設が担っていたのには、とても驚きました。日本の頭脳と進んだ技術が世界に貢献していると知り、うれしかったです。そして、それを実際に見学できて本当に良かったと思いました。その後、実際にみんなでインドネシアの電車に乗ってみました。MRTの工事現場を見学したからこそ、多くの人の努力と連携のおかげで、今、この電車が走っていると思いました。駅のホームの雰囲気や人々が並んでいる様子が、日本の駅に似ていると思いました。このMRTがこれからも、インドネシアの人々の快適な生活を支え、そして、日本とインドネシアの懸け橋になっていくことを願います。



③ SMAN62学校交流

この日私たちは、ジャカルタにあるSMAN62という高校に行きました。学校に入ると、校舎の至る所に高校生が身を乗り出してくれていて、ワーッと歓声と拍手に包まれました。まるでスターのような気分でした。最初はお互いに出し物を披露しました。インドネシア高校生は、伝統的な踊りを披露してくれました。私たちはソーラン節を披露しました。現地の高校生のみんな掛け声を真似てくれて、2回目は私たちと混ぜてソーラン節を踊ってくれました。とても盛り上がり、一気に仲が深まったと感じました。ペアの子に校舎を案内してもらったときには、インドネシアの学校の雰囲気を感ずることができました。ごちなく、決して上手とは言えない英語でも、お互いの国の学校の共通点や相違点を見つけ、話すこともできました。

今回の研修では、このように文化や習慣の異なる国だったとしても、相手を認め合い話し合うことが互いの友好関係、信頼関係を築き上げることに繋がっていくのだと強く感じました。これこそがこの先国際協力をしていくうえでの大切な鍵だと思いました。



④ 戦跡訪問(Koji Café・英雄墓地)

終戦80年を迎える今夏、私たちは南ジャカルタ市にあるKoji Caféで、戦後も帰国せずインドネシアに残った残留日本兵についてのお話を聞いた後、カリバタ英雄墓地を訪れました。帰国せずにインドネシアの独立支援のためオランダと戦った日本兵たちですが、日本からは「裏切り者」として見られていたそうです。現代を生きる私たちにとって、このことは悲しく、胸が締めつけられるような思いですが、当時の日本からすれば、普通だったのかもしれない。立場が変われば、状況が変化し、敵や味方を変える。英雄と呼ばれる人々も、立場によっては敵や悪者になってしまうことをこの研修を通して学びました。こうして戦ってくれる人々がいなければ、今の日本とインドネシアの友好関係はなく、研修先がインドネシアではなかったかもしれないことも心に刻んでおきたいと思います。そしてこれからは、彼らに感謝しながら国際平和について考え、実現に向けて一歩ずつでも近づける努力をしていきたいです。



⑤ ジャカルタリサイクルセンター

インドネシアは、焼却ではなく、リサイクルに重きを置いています。しかし、リサイクルできないゴミは、全て最終処分場に流されます。その最終処分場も、容量がもうすぐで超えてしまうため、JRCでは、できるだけエンドポイントに行くゴミの量を減らす取り組みが行われています。日本では焼却がメインで行われていますが、鹿児島県の大崎町など、焼却に頼らないゴミの管理の仕方でも成功している自治体もあります。そおりサイクルセンターさんは大崎町のノウハウを使ってJRCでも、環境負担の大きい焼却に頼らない、ゴミ処分の効率化を進めています。



しかし、大崎町とジャカルタは人口の規模感が違ってノウハウをそのままインドネシアに輸出するのは難しいのではないかと考えた方もいらっしゃるでしょう。そこでJRCの方がおっしゃったのが、「最初の一つの村から。モデルエリアを作ることが大切」ということです。確かにマナーを普及したり意識改革するのに時間がかかるのは万国共通で、日本も50年前はポイ捨てが多かったり、電車の中で当たり前のようにタバコを吸っていたような時代があり、それでも時間をかけてマナーを身につけて今の整った日本があることにはじめて気付かされました。

JICAの国際協力を見る中で、思ったのが、協力相手の国のことをとても大切に考えているということです。早く終わらせようと焦ることなく、地道ながらも時間を惜しみなくかけ、現地の人々と共に一から作り上げていく姿に感銘を受けました。

日本での生活では、目を背けてしまいがちなゴミの処分について、インドネシアで考える機会があったことはとても意味のあることだと思いました。

⑥ JOCV活動先チマヒ学校訪問

私たちは、チマヒにあるJOCV(青年海外協力隊)の活動先の小学校を訪問しました。小学生の子どもたちが日本語とインドネシア語が混ざった歌を歌いながら私たちを温かく歓迎してくれました。ウェルカムセレモニーでは、インドネシアの伝統的なパフォーマンスを披露してください、私たちはけん玉のパフォーマンスでお礼をしました。インドネシアの子どもたちを巻き込んだけん玉のパフォーマンスでは、彼らの異文化に積極的に関わる姿勢に圧倒されました。その後、6年生約60名と環境ワークショップを行いました。自分たちが行っているエコアクションを絵と文字で表現し、それについて話し合いました。同じグループだった小学生の意見を聞いたことで、私たちの行動には未来を変える力があると確信しました。自分たちにできることは何かを考え、問題を身近に感じ、自分事として捉えた上で行動に移していくことが大切であると改めて実感しました。言語や文化は違っても同じ物事に向き合い、話し合うことが課題の解決に繋がると思いました。よりよい環境、世界をつくるために自分にできることを見つけ、身近なところから広げていきたいです。



⑦ 報告会@JICAインドネシア事務所

私たちはJICAの方や今までの研修でお世話になった方をお呼びしJICA事務所にて今回の研修の報告会を行いました。ここでは各々が研修で得た経験や人との繋がりをこれからも大切にしたいと話しました。特に皆が得た学びはご縁と恩の大切さです。例えばインドネシアと日本、現地の方とJICAの方、私たち生徒など全ては小さなご縁の繋がりでできています。特にJICAの方は長い時間をかけ現地の方と濃密なコミュニケーションを図り異文化理解だけでなくインドネシアの発展に大きく貢献してきました。JICAの方や現地の方、尾木直樹先生、そしてこの研修で出会った仲間との出会い、これら全てがまた小さなご縁の積み重ねです。ご縁は積み重なって恩となり、そして恩返しをすることでまた新たなご縁を作ります。つまり全てのご縁は繋がりが続いているのです。だからこそ研修で得た学びやこれから待ち受ける出会い全てに感謝し、恩返しとして学びを発信することでここで得た出会いを次に繋げていくことの大切さを改めて実感しました。たった1週間にも満たない研修で人生は変わる、そんな濃密で私たちにとって大切な研修だったと改めて実感した報告会でした。これからも全ての出会いに感謝して学び、繋がりが続ける私たちがたいです。



⑧ ホームビジット

最終日、帰国前の最後のプログラムは「ホームビジット」でした。私たちは3つのグループに分かれ、それぞれジャカルタにある家庭を訪問しました。

家に入ると、まずホストファミリーの方からたくさんのお土産をいただきました。私たちからも日本のお土産をお渡しし、ちょうどお互いにプレゼントを交換するような形になりました。その後はホストファミリーの皆さんと一緒にランチを楽しみました。インドネシアの家庭料理を食べるのは人生で初めてでしたが、とても美味しく、日本の料理に似たメニューもありました。食事中は互いに質問をし合いました。英語があまり通じず、最初は会話がなかなか続きませんでした。スマホの翻訳アプリを使いながらサッカーや音楽の話題で盛り上がり、次第に打ち解けていきました。

あっという間に時間が過ぎ、気づけば出発の時刻が近づいていました。最後にホストファミリーがインドネシアの民族衣装「バティック」をプレゼントしてください、思わぬサプライズに私たちは感謝の気持ちでいっぱいになりました。出発の際、バスの中から手を振ると、ホストファミリーの皆さんも私たちが見えなくなるまで手を振り続けてくれました。インドネシアの人々の温かさに触れることができた、忘れられないひとときでした。



英語で広がる世界、心でつなぐ世界

2023年度 中学生の部 最優秀賞 佐藤 悠雅



7月30日、SMAN62というインドネシアの高校を訪問した。現地の高校生が熱烈な素晴らしい歓迎で迎えてくれた。彼らの明るい雰囲気のおかげで、すぐに打ち解けることができた。彼らは本当に温かくて優しく、国や宗教、言語の壁を超えて人と人がつながることの大切さを改めて感じた。特に驚いたのは、英語力の高さだ。私たちは、環境問題など様々なテーマを英語で議論した。共に考え語り合い、共有した時間はとても有

意義だった。英語はただの教科ではなく、人とつながるための大事なツールだということを改めて強く実感した。そして、自分の英語力をもっと磨きたいという気持ちが高まった。

また、JICAインドネシア事務所を訪問し、現地での国際協力の取り組みについて話を聞き、国際協力の重要性について深く考えるきっかけとなった。

さらに、今回の研修では、日本人としてどう見られているのかということも強く意識するようになった。自分が日本を代表してここに来ているという責任や、もっと日本のことを説明できるようになりたいという思いが生まれた。自分の国を知ることも、国際交流の大切な一歩なのだと感じた。

私はこの研修で、言葉の力と人と人のつながりの大切さ、そして国際協力の意味を学んだ。今回の研修に参加できたこと、多くの出会いや発見があったことに感謝し、将来に生かしていきたい。

一期一会と未来に託された想い

2024年度 高校生の部 優秀賞 中村 嶺治



一期一会。私はインドネシア研修を通して、人々との出会いと交流が、自分自身、そして世界をも変える力を持っていると強く感じた。

日本とインドネシア、それは約6000kmも離れた、文化も言葉も全く異なる国同士。また、過去には第二次世界大戦にて争ったという歴史を持つ。しかし、現在に至るまでの友好関係が保っているのは、日本人の先人と現地の人々との交流、そして、MRT（ジャカルタ都市高速鉄道）等の国境を越えた協力のおかげだと考える。研修二日目の午後、私たち研修生はMRTの工事

現場内部を視察した。そこでは汗を一緒に流して働く日本人と現地の方々がいた。互いに協力し合い、そして何より工事現場には笑顔が絶えなかった。そこで私は、実感した。個々の信頼関係が国際協力の原動力であることを。この人たちの”出会い”が世界を繋げているのだと感じた。

それだけではない。三日目に伺ったカリバタ英雄墓地では終戦後もインドネシアに残留し、インドネシア独立戦争に協力した残留日本兵の方々のお墓に献花した。1000人の残留日本兵の方々はその意思で異国の地に残ることを決め、独立のために身を投じて協力をしたのだ。彼らの意思が一国の独立の一助となり、そこで生まれた現地の人々との交流は今も受け継がれ、そして現在は英雄として異国の墓地に眠っている。

つまり、私の言いたいことはこうだ。一見、小さな出会いであっても、それは一期一会であり、今と未来をつなぐ架け橋になる。そして今、私たち研修生はこの研修を通してかけがえのない14人の仲間、尾木直樹先生、JICA職員の方々、現地の人々に出会うことができた。次は私たちの番だ。私たちの出会いに託された想いを未来につなげ、平和と信頼のある世界のために身を投じて尽力したい。

審査員一覽

中学生の部

- 審査員長 **尾木 直樹**
教育評論家・法政大学名誉教授
東京都立図書館名誉館長
- 審査員 **岩崎 紀美子**
全日本中学校長会 編集部長
多摩市立青陵中学 校長
- 審査員 **北野 礼美**
日本航空株式会社 ソリューション営業本部
東京支社 顧客販売部 部長
- 審査員 **中村 絵乃**
特定非営利活動法人 開発教育協会
理事・事務局長
- 審査員 **加瀬 晴子**
JICA国内事業部 市民参加推進課 課長

高校生の部

- 審査員長 **星野 知子**
俳優・エッセイスト
- 審査員 **清水 大介**
全国国際教育研究協議会 会長
東京都立昭和高等学校 校長
- 審査員 **寺澤 正道**
全日本空輸株式会社 営業センター
法人営業部 部長
- 審査員 **高見 博**
世界銀行 駐日特別代表
- 審査員 **西 健太郎**
株式会社スクールパートナーズ
高校生新聞 編集長
- 審査員 **中根 卓**
JICA国内事業部 部長

中学生・高校生の部共通

- 審査員 **西崎 寿美**
外務省 国際協力局 審議官
- 審査員 **川淵 貴代**
JICA地球ひろば 所長

応募総数

中学生の部
11,943作品 **384**校

高校生の部
17,911作品 **221**校

応募総数
29,854作品 **605**校

入賞者一覽

※最優秀賞、優秀賞、審査員特別賞、
国際協力特別賞はP.01に記載

国内機関長賞

87名

中学生の部

- 土屋 陽愛 留寿都村立留寿都中学校
武山 和樺乃 新得町立屈足中学校
庄司 幸之助 岩手大学教育学部附属中学校
鈴木 想世 大河原町立大河原中学校
松井 涼斗 羽後町立羽後中学校
岡本 千宙 遊佐町立遊佐中学校
後藤 健太 福島市立清水中学校
加倉井 楓 茨城大学教育学部附属中学校
加藤 凜空 吉岡町立吉岡中学校
小西 蒼生 学校法人佐藤栄学園栄東中学校
ウィンクラー セシリー 学校法人市川学園市川中学校
須藤 ソフィア 頌栄女子学院中学校
高瀬 仁李凷 長岡市立大島中学校
傳田 珠久 信州大学教育学部附属長野中学校
高橋 このか 相模原市立藤野中学校
石川 莉央 河口湖南中学校組合立河口湖南中学校
鶴飼 真平 立山町立雄山中学校
小林 杏 金沢大学附属中学校
橋本 夏伶 福井県立高志中学校
中島 玲愛 土岐市立西陵中学校
仙田 真子 名古屋国際中学校
城山 蒼空 伊勢市立二見中学校
中垣 空芭 立命館山中学校
大槻 茉穂 綾部市立綾部中学校
上埜 真由 枚方市立楠葉西中学校
田 ジン 芦屋学園中学校
石田 瑛大 奈良教育大学附属中学校
奈須 麻実 古座川町立明神中学校

- 三原 渚紗 出雲市立大社中学校
二浦 桜子 岡山県立津山中学校
矢賀 千紘 AICJ中学校
中村 紀彦 慶進中学校
多田 彩乃 大手前高松中学校
和田 いちか 西条市立西条南中学校
田中 かおり 高知市立土佐山学舎
小澤 南帆子 学校法人明治学園明治学園中学校
井上 紗那 佐賀大学教育学部附属中学校
近藤 寛菜 純心中学校
原田 悠斗 菊陽町立菊陽中学校
深川 花心 大分県立大分豊府中学校
池田 虎吉 学校法人大淀学園鶴翔中学校
牛河 孝輔 ラ・サール中学校
長田 陽愛 豊見城市立豊見城中学校

高校生の部

- 三浦 かなな 北海道札幌国際情報高等学校
蝦名 玲乃 学校法人明の星学園青森明の星高等学校
千葉 菜心 学校法人龍澤学園盛岡中央高等学校
櫻井 彩花 (学校名非公表希望)
細谷 磨弥 (学校名非公表希望)
木村 綾花 山形県立山形北高等学校
菅原 那音 福島県立郡山萌世高等学校
関根 翠姫 開智望中等教育学校
清水 桜羽 栃木県立宇都宮北高等学校
加藤 実和 埼玉県立蕨高等学校
吉田 桜々々 学校法人鎌形学園東京学館高等学校
西本 大晟 立教池袋高等学校
小泉 憂花 新潟青陵高等学校
杉本 樹香 長野清泉女学院高等学校

- 川又 彩乃 桐蔭学園中等教育学校
梅澤 希実 山梨県立甲府第一高等学校
篠原 愛怜 学校法人富山国際学園富山国際大学付属高等学校
齋藤 優成 独立行政法人国立高等専門学校機構福井工業高等専門学校
堤 優姫 岐阜県立加茂農林高等学校
大川 大和 静岡県立沼津東高等学校
出口 乃朱 学校法人市野学園名古屋経済大学市野高等学校
井上 愛結 立命館山高等学校
日野 陽香 学校法人永守学園京都先端科学大学附属高等学校
平岡 莉子 学校法人大阪産業大学大阪桐蔭高等学校
平田 響子 東洋大学附属姫路高等学校
堀田 紗愛 日本教育学院高等学校
宮崎 大輔 和歌山県立桐蔭高等学校
田村 萌梨 鳥取県立鳥取西高等学校
本田 博聖 鳥根県立江津清和養護学校
蜂谷 京都子 岡山市立岡山後楽高等学校
戸川 舞桜 広島県立広島教智学園高等学校
泉 香帆 山口県立大津緑洋高等学校 (大津校舎)
寒川 美希 徳島県立城南高等学校
三好 七空 香川県立坂出高等学校
宮田 りん 学校法人済美学園済美高等学校
野村 憂音 高知県立室戸高等学校
細井 郁花 福岡第一高等学校
光武 心花 佐賀県立佐賀商業高等学校
森 勇翔 長崎県立佐世保商業高等学校
境 琴音 熊本市立必由館高等学校
藏下 朝子 大分県立大分上野丘高等学校
長野 加鈴 学校法人旭進学園宮崎第一高等学校
齊藤 聖良 鹿児島県立鹿児島南高等学校
小林 咲結 沖縄県立名護高等学校

佳作

119名

中学生の部

岩崎 凌空	塩竈市立第一中学校
本間 惺大	長井市立長井北中学校
小林 千紗	北塩原村立裏磐梯中学校
石原 大貴	前橋市立第七中学校
手島 夕葵	前橋市立第七中学校
森島 玲乃	本庄東高等学校附属中学校
大蔵 千歳	学校法人佐藤栄学園栄東中学校
中根 隆成	学校法人立教学院立教新座中学校
小泉 圭	市川市立第二中学校
大池 悠太	市川市立第二中学校
伊藤 綺那	芝浦工業大学柏中学校
大野 花歩	学校法人市川学園市川中学校
王 美希	学校法人市川学園市川中学校
高草木 航汰	学校法人市川学園市川中学校
大坂 樹名	学校法人東京聖徳学園光英VERITAS中学校
倉掛 聖	お茶の水女子大学附属中学校
西村 七夏	お茶の水女子大学附属中学校
森 雄章	お茶の水女子大学附属中学校
乙幡 恵玲奈	学校法人創価学園創価中学校
小野 真音	頌栄女子学院中学校
山西 菜々	頌栄女子学院中学校
加島 佑佳	頌栄女子学院中学校
田中 悠花	聖心女子学院中等科
高橋 りっか	筑波大学附属中学校
利根川 快斗	東京都立大泉高等学校附属中学校
渡邊 ひなた	信州大学教育学部附属松本中学校
吉岡 実桜	松本市立梓川中学校
務台 紗代	学校法人教学園才教学園中学校
佐藤 蒼真	愛西市立佐屋中学校
川添 晟真	愛西市立佐屋中学校
車谷 希	名古屋国立北中学校
西山 将史	鈴鹿中等教育学校
矢部 遼平	大津市立粟津中学校
馬場 陽菜乃	立命館守山中学校
安原 一優	立命館守山中学校
徳千代 アリス	立命館守山中学校
村田 愛理彩	立命館守山中学校
矢部 ひまり	大津市立粟津中学校
東 穂乃歌	亀岡市立大成中学校

黒木 詩	亀岡市立南桑中学校
荒川 悠輝	京都教育大学附属京都小中学校
楠本 健琉	学校法人永守学園京都先端科学大学附属中学校
梶川 桃子	枚方市立楠葉西中学校
秦 蒼維	学校法人羽衣学園羽衣学園中学校
末廣 美風	学校法人四天王寺学園四天王寺中学校
木内 朋果	学校法人四天王寺学園四天王寺中学校
長富 日々	神戸国際中学校
家城 龍乃介	大和郡山市立郡山中学校
小西 多香空	岩出市立岩出中学校
新田 一仁	広島県立広島観智学園中学校
藤崎 偉大	広島県立広島観智学園中学校
平池 在	広島県立広島中学校
加藤 大雅	九州国際大学付属中学校
妹尾 周	学校法人明治学園明治学園中学校
松永 一輝	菊陽町立菊陽中学校
小牧 みなみ	鹿児島市立城西中学校

高校生の部

軽部 未華	学校法人龍澤学園盛岡中央高等学校
大畑 心春	学校法人龍澤学園盛岡中央高等学校
佐々木 健	独立行政法人国立高等専門学校機構仙台高等専門学校
佐藤 遥	常盤学園高等学校
鈴木 一織	学校法人尚綱学院尚綱学院高等学校
浅野 栞	学校法人尚綱学院尚綱学院高等学校
江刺 袖香	宮城県仙台二華高等学校
及川 陽依	宮城県仙台東高等学校
佐藤 妃那子	山形県立鶴岡中央高等学校
中井 陽	茨城県立多賀高等学校
若山 晃志郎	開智望中等教育学校
遠藤 流汐	栃木県立宇都宮北高等学校
ウィジェナカ ヴィララ	学校法人渋谷教育学園幕張高等学校
松田 実	晃華学園高等学校
友井 悠乃	東京都立川国際中等教育学校
橋本 心	頌栄女子学院高等学校
浦野 亜澄	頌栄女子学院高等学校
矢澤 友梨	郁文館グローバル高等学校
雨宮 碧海	中村高等学校
伊藤 匠汰	本郷高等学校
平櫛 花音	駒込高等学校
甲斐 万璃子	駒込高等学校
嘉藤 璃々亜	北豊島高等学校

ジャリファ ラハマン	神奈川県立橋本高等学校
清田 葵生	学校法人逗子開成学園逗子開成高等学校
伊藤 怜美	川崎市立橋高等学校
鈴木 楓空	新潟県立国際情報高等学校
今村 ゆい	新潟市立高志中等教育学校
渡辺 みゆ	学校法人富山国際学園富山国際大学付属高等学校
竹内 琴葉	学校法人富山国際学園富山国際大学付属高等学校
古川 優香	学校法人富山国際学園富山国際大学付属高等学校
佐々木 光梨	学校法人富山国際学園富山国際大学付属高等学校
川添 有海	学校法人富田学園富田高等学校
三輪 明未	不二聖心女子学院高等学校
矢部 湊仁	島田樟誠高等学校
小松 快斗	愛知県立津島高等学校
笹山 礼奈	学校法人市邨学園名古屋経済大学市邨高等学校
末松 弥佳	名古屋国立北高等学校
木友 彩音	名古屋国立北高等学校
井内 翔太	大成高等学校
亀井 江麻	京都府立洛北高等学校
辰巳 珠理	ノートルダム女学院高等学校
杉本 瑞采	学校法人明德学園京都明德高等学校
坂本 明優	同志社女子高等学校
山本 菜緒	大阪府立三国丘高等学校
國重 隆平	大阪星光学院高等学校
青木 孝憲	大阪星光学院高等学校
藤田 優希	ブルー学院高等学校
野上 悠奏	大阪学芸高等学校
松本 樹里	学校法人創価学園関西創価高等学校
鶴谷 大我	兵庫県立篠山産業高等学校
兒玉 実桜	ノートルダム清心学園清心女子高等学校
田中 望結	ノートルダム清心学園清心女子高等学校
森 咲奈	福岡県立修猷館高等学校
目野 心愛	福岡県立山門高等学校
大隈 友安子	福岡県立明善高等学校
竹本 理央奈	長崎県立長崎西高等学校
福留 夢花	宮崎県立宮崎西高等学校
淵上 敬太	宮崎県立延岡高等学校
生駒 結芽	宮崎県立宮崎南高等学校
貞廣 心愛	宮崎県立宮崎南高等学校
廻 佳歩	鹿児島市立鹿児島玉龍高等学校
前田 桜来	林口康橋国際学校

青年海外協力隊OB会会長賞 12名

中学生の部

氏家 悠喜	福島市立平野中学校
中道 美月	勝山市立勝山中中学校
佐藤 颯馬	愛西市立佐屋中学校
杉山 若葉	東広島市立高美が丘中学校
黒木 祐花	AICJ中学校
高原 葵	佐賀大学教育学部附属中学校
後藤 真央	大分県立大分豊府中学校

高校生の部

佐藤 なずな	山形県立鶴岡中央高等学校
堀越 悠花	学校法人鎌形学園東京学園高等学校
山崎 翼	学校法人富山国際学園富山国際大学付属高等学校
柳野 天希	広島県立総合技術高等学校
宇都宮 りお	愛媛県立宇和島東高等学校

入賞者一覧／特別学校賞一覧

特別学校賞受賞校

53校

中学生の部

Table listing special school award recipients for middle school students across various prefectures like Aomori, Niigata, Tokyo, etc.

Table listing special school award recipients for middle school students in Fukuoka and Oosaka.

高校生の部

Table listing special school award recipients for high school students across various prefectures like Hokkaido, Miyagi, Iwate, etc.

Table listing special school award recipients for high school students across various prefectures like Gifu, Aichi, Kanagawa, etc.

学校賞受賞校

103校

中学生の部

Table listing school award recipients for middle school students across various prefectures like Hokkaido, Iwate, Fukushima, etc.

Table listing school award recipients for middle school students in Hyogo and Kagawa.

高校生の部

Table listing school award recipients for high school students across various prefectures like Hokkaido, Iwate, Fukushima, etc.

Table listing school award recipients for high school students across various prefectures like Chiba, Tokyo, Kanagawa, etc.

国際理解教育／開発教育のための JICAのプログラム案内

全国15か所にJICAの国内拠点があります。国際理解、開発教育のための多様なプログラムがありますので、是非、各リンク先を参照の上、ご利用ください。

地球ひろば訪問

JICA地球ひろばの目玉展示「地球ナビ」では、SDGsの各ゴールについて学べる。



▲▲▲
地球ひろばの
最新情報

「市民参加による国際協力の拠点」としてオープンしたJICA地球ひろば。

東京をはじめ全国8か所で、映像やクイズによる展示に加え、民族衣装の試着や世界の料理を味わえるレストランなど、“見て・聞いて・さわって”、途上国の暮らしや地球が抱える課題、国際協力の現状を学べる場所となっている。体験ゾーンの体験型展示を見て回るオンラインツアーも実施。JICA横浜に併設する海外移住資料館では、日本人の海外移住の歴史と日系人の現を学ぶことができる。

教員向け研修



▲▲▲
教員向け研修の
最新情報



1965年から続く教師海外研修。約10日間の海外研修と渡航前後の国内研修で構成。

開発教育に興味・関心のある教員を対象に、途上国を訪問する「教師海外研修」

、それぞれの国内拠点でテーマ別に行われる「国内研修」、指導案の作成・授業実践のレベルアップに取り組む「指導者研修」など、対象者や目的が異なるさまざまな研修を実施している。参加者同士の意見交換や協働作業を通してネットワークを築くことで、研修後も各地域の学校教育関係者と連携してさらなる開発教育の推進を図る。

国際協力出前講座



▲▲▲
国際協力出前講座の
最新情報



講師がアフリカ地域の民族衣装を着て、現地の生活・文化を子どもたちに紹介。

海外協力隊の経験者や職員、国際協力専門員など国際協力に携わった

JICA関係者や途上国からの研修員が講師となり、自らの体験をベースに国際理解につながる内容を伝える。講師が直接訪問する「対面型」と、途上国で活動中の隊員などと交流する「オンライン型」の2種類から選択可能。体験談、異文化理解、国際協力キャリア、SDGsなど希望のテーマに沿って講師と講座内容を組み立てる。

12 JICA 関西 (かんさい地球ひろば)★

14 JICA 中国 (ひろしま地球ひろば)★



13 JICA 四国

15 JICA 九州 (きゅうしゅう地球ひろば)★

16 JICA 沖縄 (おきなわ地球ひろば)★



① JICA 北海道 (札幌／ほっかいどう地球ひろば)★

② JICA 北海道 (帯広／おびるっく)★



JICAの国内拠点 (★:体験型施設)



もっと知りたい
JICA国内拠点

国内拠点の最新情報を
JICAのサイトでチェック



開発教育支援教材

▲▲▲
開発教育支援教材の
最新情報

冊子教材はダウンロードだけでなく、
無料での貸し出しや提供にも対応。



子どもたちが世界
の現状や課題について理解を深めるた

めの教材を作成し、無料で提供している。主体的・対話的で深い学びにつながるよう、授業でそのまま活用できるワークや、映像、マンガで学ぶもの、さらにはゲームを取り入れたものまで各種揃える。多文化共生の教材や、教員向けに授業のヒントとなるようなガイド冊子や指導案事例も。すべて地球ひろばのホームページからダウンロードが可能となっている。

国際協力エッセイコンテスト



▲▲▲
エッセイコンテストの
最新情報

2024年の表彰式での一枚。
審査員との座談会や受賞者同
士のワークショップも行った。



途上国の現状や
日本との関係に
ついて理解を深

め、グローバル社会の中で自分たち一人ひとりがどのように行動すべきかを考えてもらうことを目的として、中学生と高校生を対象に毎年開催。上位入賞者には約1週間の海外研修やフェアトレード商品を贈呈。海外研修では訪問国の文化体験や同年代の生徒との交流、現場が抱える課題とそれらに対するJICAの取り組みを視察することで、国際理解をさらに深める。

言葉にすれば、
世界を動かす力になる。



JICA 国際協力中学生・高校生 エッセイコンテスト 2025

【後援団体】

外務省、文部科学省、世界銀行東京事務所、全日本中学校長会、全国高等学校長協会、
全国国際教育研究協議会、日本私立中学高等学校連合会、
認定特定非営利活動法人開発教育協会、NHK、
各都道府県教育委員会及び政令指定都市教育委員会、各都道府県青年海外協力隊 OB 会

【協賛団体】

日本航空株式会社、全日本空輸株式会社、株式会社スクールパートナーズ

【協力団体】

株式会社日刊県民福井、上毛新聞社